

## 手話も「言語」の一つとする *Language Includes Signed Languages*

北 村 一 親

### 0. はじめに

本稿の標題は「障害者の権利に関する条約」Convention on the Rights of Persons with Disabilities 第2条の同条約における「言語」に関する定義の一部から採ったものである。この条約は2001年12月の第56回国際連合総会においてメキシコ合衆国提案の決議案を採択した決議A/RES/56/168に基くもので、8回に亘る特別（アドホック）委員会を経て、2006年12月13日、第61回国際連合総会本会議にて採択されたものである。<sup>1)</sup>日本政府も2007年9月28日（現地時間）に署名したが、<sup>2)</sup> 2008年1月現在、未だ国会には提出されていない。

この条約において「言語」とは次のように定義されている。

“Language” includes spoken and signed languages and other forms of non-spoken languages<sup>3)</sup>

即ち、signed language「手指によってなされる言語」も「言語」とするということが明示されているのである。

本稿は「手指によってなされる言語」、つまり「手話」sign languageに関して筆者が研究を行うに際してのprolegomenaとなるものである。

---

\*）本研究を実施するにあたり平成19年度日本学術振興会科学研究費補助金（萌芽研究）による補助を受けた。（課題番号19652035）

1) 外務省「障害者権利条約採択の経緯」(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jinken/shogaisha.html>).

2) 外務省「障害者権利条約の署名について」(プレスリリース。[http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/h19/9/1175621\\_812.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/h19/9/1175621_812.html)).

3) United Nations, “Final report of the Ad Hoc Committee on a Comprehensive and Integral International Convention on the Protection and Promotion of the Rights and Dignity of Persons with Disabilities, Annex I, Convention on the Rights of Persons with Disabilities” (<http://www.un.org/esa/socdev/enable/rights/ahc8docs/ahcfinalrepe.htm>).

日本政府がこの条約に署名するに際し、閣議に提出した「仮訳文」では次のように訳されている。([http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/treaty/shomei\\_32.pdf](http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/treaty/shomei_32.pdf))

「言語」とは、音声言語及び手話その他の形態の非音声言語をいう。

第50条に“The Arabic, Chinese, English, French, Russian and Spanish texts of the present Convention shall be equally authentic”とあり、後に再びこの条文中に言及することになるので他の言語による条文中の

## 1. 手話（手話言語）とは

本稿で「手話」に言及する場合は筆者が「狭義」と規定する「手話」を指し、さらに自律的な言語としての位置付けを明確にする場合に「手話言語」とする。なお、筆者が「広義」とする「手話」は「手話言語」に「音声言語対応手話」（後述）を加えた概念である。

手話言語は自然言語であり、後に述べるように独自の文法体系を有する。Ethnologue Report for Deaf sign languageにはアメリカ手話American Sign Language, イギリス手話British Sign Language, 日本手話Japanese Sign Language等の121の「聾者」<sup>3 bis)</sup>が用いる手話Deaf Sign Languageが挙げられている。<sup>4)</sup>手話言語は(両)手指を中心とした上肢の動きおよび頭部や顎部の動き、顔面の表情などにより、主に聾者間でコミュニケーション手段として使用される自律的な言語である。未だに誤解が多いが、手話言語はパラ言語（周辺言語）でもなく、またノンヴァーバルなコミュニケーション（非言語伝達）手段でもない。Noam Chomskyと共に「認知革命」を惹き起こしたGeorge Armitage Miller<sup>4 bis)</sup>ですら「聾者のための手話の語彙となる身振りは、もともと異なる言語を話す健聴者2人が自発的に用いそうなパントマイムのようなものからおこった。ある身振りがくりかえし用いられるうちに、標準化されて慣用的な手話になったのであるが、その多くは図像的、絵画的な性格を保っている」<sup>4 ter)</sup>と部分的に誤解している。詳細は割愛するが、このような古くから続く多くの偏見に対して現在の日本における手話言語学の旗手、市田泰弘は正当に反論している。<sup>5)</sup>

Carol PaddenとTom Humphriesが「英語が音を使うようにASL [=American Sign Language アメリカ手話] は身振りをを用いはするけれども、英語がたんに雑音の寄せ集めではないように、ASLもたんなる身振りからできあがっているわけではない」<sup>5 bis)</sup>と興味じくも言うとおりに、手話は個人的な身振りの集合体ではなく言語なのである。

Ray L. Birdwhistellは会話のわずか30パーセントから35パーセントが言葉によって伝えられるにすぎないと推測している。<sup>6)</sup>手話が言語であるからには、当然、ノンヴァーバル（非言語）な表現も存在するが、ヴァーバルな表現とノンヴァーバルな表現は共に手指の動きや顔の表情

該当箇所も示しておく。(上記の国際連合WebサイトURLの末尾はそれぞれahcfinalrepa.htm, ahcfinalrepc.htm, ahcfinalrepf.htm, ahcfinalrepr.htm, ahcfinalreps.htmとなる)

### “اللغة” تشمل لغة الكلام ولغة الإشارة وغيرها من أشكال اللغات غير الكلامية

- “语言”包括口语和手语及其他形式的非语音语言
- On entend par «langue», entre autres, les langues parlées et les langues des signes et autres formes de langue non parlée
- «язык» включает речевые и жестовые языки и другие формы неречевых языков
- Por “lenguaje” se entenderá tanto el lenguaje oral como la lengua de señas y otras formas de comunicación no verbal

これら6ヶ国語の各原文は全くの同一表現ではなく、微妙に異なる。特にスペイン語版においては「音声言語」el lenguaje oralおよび「手話言語」la lengua de señasに対し、「非音声コミュニケーションの他の形式」otras formas de comunicación no verbalとなっている。(lenguajeとlenguaの違いも気になる。)他の5ヶ国語ではlanguage, اللغة 語(言), langue, языкである。

という身振りで現れるため、音声言語の使用者には判別し難い。

手話言語の地位が法的に保障されている国も多く、近年、増加の傾向にある。2006年の時点で憲法において手話が認められている国が8ヶ国、法律や政策で認められている国が23ヶ国、政府の決議で認められている国が1ヶ国、手話のための法律がある国が1ヶ国となっている。<sup>7)</sup>例えば、フィンランドでは憲法に「フィンランドの国語はフィンランド語とスウェーデン語である」という国語の規定と同時に「先住民としてのサーミ人、ならびにロマ人やその他の集団は、自らの言語と文化を維持し発展させる権利を有する。サーミ人が公的機関においてサーミ語<sup>8)</sup>を使用する権利については、法により定める。手話を使用する者、障害のために通訳や翻訳の助けを必要とする者の権利は、法により保障される<sup>9)</sup>と手話をはじめとする弱小言語への法的保障が明記されており、「基本教育法」Perusopetuslakiにおいて教授言語をフィンランド語とスウェーデン語とする外に、「教授言語（として）はサーミ語、ロマ語あるいは手話でもありうる Opetuskielenä voi olla myös saame, romani tai viittomakieli」（斜字体は筆者）としている。<sup>10)</sup>また、ニュージーランドでは2003年に政府がニュージーランド手話を国の第三の公用語として認める方針を表明した。<sup>11)</sup>手話言語の地位が法的に保障されている国の中でも特筆すべきはスロヴァキアの「ろう者の手話に関するスロバキア共和国法」（1995年6月26日成立）で、第3条第1項に「手話とはろう者のコミュニケーションの言語である」とされ、続く第2項に「ろう者の手話は自然な視覚・ジェスチャー言語体系であり、規則的動作、重複、手と指の動作、顔の模倣を持つ」と明確に定義されている。<sup>12)</sup>

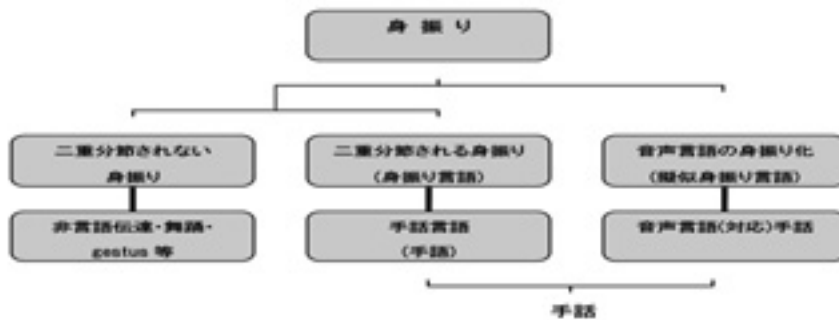


図1 「身振り」の分類

3 bis) 「聾」に関する定義は拙稿（共著）「彼ら地を受け継がん — 障害学生支援に向けて」（『アルテス リベラレス』78号, 2006年, 5章）において学校教育法や身体障害者福祉法、さらにはWHOの聴覚障害等級表等々を基に議論した。また、文化的観点から木村晴美と市田泰弘は「ろう者とは日本語という、日本語とは異なる言語を話す、耳の聞こえない言語的少数者である」と新たに定義している。（木村晴美 / 市田泰弘「ろう文化宣言以後」ハーラン・レイン（編）『聾の経験 — 18世紀における手話の「発見」』石村多門（訳）、東京電機大学出版局、2000年、399頁）ちなみに、斯界に旋風を巻き起こした「ろう文化宣言」は次の文献に所収：木村晴美 / 市田泰弘「ろう文化宣言 — 言語的少数者としてのろう者」『現代思想』23巻3号、1995年3月、354-362頁；[再掲]『現代思想』24巻5号、1996年4月（臨時増刊）、8-17頁；[単行本化] 現代思想編集部『ろう文化』青土社、2000年、8-17頁。

4) Ethnologue Report for Deaf sign language (Raymond G. Gordon, Jr. (ed.), Ethnologue : Languages of the World, Dallas, Tex. : SIL International, fifteenth edition, 2005. Online version : [http://www.ethnologue.com/show\\_family.asp?subid=90008](http://www.ethnologue.com/show_family.asp?subid=90008)).

表1 諸コミュニケーション・システムの比較 (Charles F. Hockettによる)

		A	B	C	D	E	F	G	H
		Some gryllidae and tettigoniidae	Bee dancing	Stickleback courtship	Western meadowlark song	Gibbon calls	Paralinguistic phenomena	Language	Instrumental music
1	The vocal-auditory channel	Auditory, not vocal	No	No	Yes	Yes	Yes	Yes	Auditory, not vocal
2	Broadcast transmission and directional reception	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes
3	Rapid fading (Transitoriness)	Yes, repeated	?	?	Yes	Yes, repeated	Yes	Yes	Yes
4	Interchangeability	Limited	Limited	No	?	Yes	Largely yes	Yes	?
5	Total feedback	Yes	?	No	Yes	Yes	Yes	Yes	Yes
6	Specialization	Yes ?	?	In part	Yes ?	Yes	Yes ?	Yes	Yes
7	Semanticity	No ?	Yes	No	In part ?	Yes	Yes ?	Yes	No (in general)
8	Arbitrariness	?	No		If semantic, yes	Yes	In part	Yes	
9	Discreteness	Yes ?	No	?	?	Yes	Largely no	Yes	In part
10	Displacement		Yes, always		?	No	In part	Yes, often	
11	Productivity	No	Yes	No	?	No	Yes	Yes	Yes
12	Traditional transmission	No ?	Probably not	No ?	?	?	Yes	Yes	Yes
13	Duality of patterning	? (Trivial)	No		?	No	No	Yes	

4 bis) 「わたし [George A. Miller] は、マサチューセッツのケンブリッジでノーム・チョムスキー、ジェリー・ブルナーと共同研究をしました。いっしょにあるいは個々におこなった研究は、以後、人々に認知革命と称されています。わたしたちの誰一人としてそれを認知革命と呼ばなかったと思いますし、目のまえにあった明確な事実を解明しようとしていただけでした」(第3回芸術・科学・文化アンシェン学院講演におけるNoam Chomskyの講演に対する質疑応答にて。ノーム・チョムスキー『言語と思考』大石正幸(訳)、松柏社、1999年、64頁)。

George A. Millerは言語学者ではなく心理学者であるが、彼の著した言語学入門書であるG. A. ミラー『入門 ことばの科学』(無藤隆 / 久慈洋子(訳)、誠信書房、1983年(原著: G. A. Miller, *Language and Speech*, 1981))は種々の学際領域から多角的に論じた好著で、元々、自然科学を専攻したYuen Ren Chao(趙元任)の言語学入門書(後述)と双璧をなすと筆者は考える。ちなみに、ChaoのCornell大学留学等に関しては拙稿「人文学の没落 — 文献学の問題と方法に関する省察(導論)」『アルテス リベラレス』81号、2007年、23-24頁参照。

4 ter) ミラー、G. A. 『入門 ことばの科学』(前掲)、22頁。ミラーの説明は大いに誤解を招きやすい表現であり、「健聴者が手話を造った」という主張ではないと思うが、音声言語も手話言語も知らない聾の子供が自発的に手話体系を開発するという事実はここで力説しておかなければならない。(Susan Goldin-Meadow / Heidi Feldman, "The Development of Language-Like Communication Without a Language Model", *Science*, Vol. 197, 1977, pp. 401-03)

5) 例えば、Joseph Schuyler Longは次のように誤った記述をしている: "In using signs to express thought an idea is presented in word pictures rather than in an orderly arrangement of single signs that correspond to single words in grammatical order. Hence there is not always an exact interpretation of the thought in words, but in pictures only. For this reason the language is manifestly imperfect when compared with written or spoken language." (J. Schuyler Long, *The Sign Language — A Manual of Signs, Being a Descriptive Vocabulary of Signs Used by the Deaf of the United States and Canada*, Washington, D. C.: Gibson, 1910, pp. 9-10)

このような誤解に対する反論は市田泰弘「誤解される言語・手話」(『現代思想』24巻5号、1996年4月、臨時増刊、233-247頁; 再録: 現代思想編集部『ろう文化』青土社、2000年、233-247頁)等で展開されている。

## 2. 言語としての手話

Ferdinand de Saussureは「言語」の本性を見出すことに関して次のように言っている。“Si l'on veut découvrir la véritable nature de la langue, il faut la prendre d'abord dans ce qu'elle a de commun avec tous les autres systèmes du même ordre ; et des facteurs linguistiques qui apparaissent comme très importants au premier abord (par exemple le jeu de l'appareil vocal), ne doivent être considérés qu'en seconde ligne, s'ils ne servent qu'à distinguer la langue des autres systèmes.”<sup>12 bis)</sup> 以下、「身振り」という動作の体系の中で手話言語を考察していくことにする。前にもごく簡単に触れたとおり「身振り」における手話言語の位置づけは図1ようになる。記号の中でも人間の「言語」にのみ見出される二重分節性の観点から(表1<sup>13)</sup> 参照), 自然発生的な「身振り」(「身振り化」は除外)を二重分節されない「身振り」と二重分節される「身振り」に分けることにする。前者の二重分節されない「身振り」とは、例えば動作や表情、視線などによるノンヴァーバル・コミュニケーション(非言語伝達)、舞踊 — 中でもハワイのフラhulaなどのポリネシアに顕著な「当て振り」や手によるジェスチャーと顔の表情によって表現されるインド・ケーララ州のカタカリkathakali, パントマイム, 密教の手印, キリスト教修道院において絶えざる祈りを促すための沈黙の中での「身振り」gestusによる意思伝達などである。ちなみに、ノンヴァーバル・コミュニケーションの身体による情報伝達をボディ・ランゲージと称するが、これは「言語」ではなく、二重分節されない「身振り」である。言語(記号)は記号の一種であるが、記号が全て言語であるとは限らないということは言うまでもない。

ハワイのフラhula(原義は「踊る」)ではmahina「月」やlā'au「木/植物」のように事物の形象を表す動作以外にもaloha「愛/愛する」やōlelo「ことば/話す」というような抽象的な表現

5 bis) キャロル・パッデン/トム・ハンフリーズ『「ろう文化」案内』森 壮也/森 亜美(訳), 晶文社, 2003年, 25頁。

6) Ray L. Birdwhistell, *Kinesics and Context : Essays on Body Motion Communication*, Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 1970, pp. 157-58.

7) 「手話が認められている国々」『手話通訳問題研究』96号, 2006年夏, 32-33頁。

8) 「サーミ」sámi(サーミ語形)は以前、周辺民族より「ラップ」と呼ばれていた民族である。Александр Рогожкин 監督のロシア映画《Кукушка / Giehka / Kaki》(С Т В, 2002 г. — 邦題は『ククーシュカ — ラップランドの妖精』)が記憶に新しい。

9) 渋谷謙次郎(編)『欧州諸国の言語法 — 欧州統合と多言語主義』三元社, 2005年, 385頁(当該箇所は吉田欣吾訳)。

アラン・カーカー他(編)『北欧のことば』(山下泰文他(訳), 東海大学出版会, 2001年)は北欧5ヶ国の公用語であるデンマーク語, スウェーデン語, 二つのノルウェー語, アイスランド語, フィンランド語以外にもフェロー語, サーミ語, グリーンランド語(東エスキモー語のイヌイット語)を概説したもので, 少数言語にも細かく配慮された好著であるが, デンマーク手話, スウェーデン手話, ノルウェー手話, アイスランド手話, フィンランド手話, フィンランド・スウェーデン手話(前掲のEthnologue : Languages of the World, Online versionによると2001年現在で使用者数150人)といった手話言語が存在するにもかかわらず, 残念ながら手話に関する言及はない。

10) 原文は<http://www.finlex.fi/fi/laki/ajantasa/1998/19980628>. ちなみに, この条文のすぐ後にサーミ人聴覚障害者には必要ならば手話言語でも教育することが明記されている。(http://www.d7.dion.ne.jp/~jussih/opetus/POLaki.htm. からの情報は有益であった。)

11) 「のぞいてみよう各国の法律」『手話通訳問題研究』96号, 2006年夏, 49頁(全日本ろうあ連盟仮訳に基づく)。

12) 長瀬 修「スロバキア共和国の手話立法」『手話コミュニケーション研究』25号, 1997年, 38頁。

も動作で示すことが可能であるが、これらの動作はこれ以上、分節できない。‘Ôleloを表す身振りは、両手を使用するか、片手のみかの違いはあるけれど、フランス手話langue des signes française (LSF)における挨拶である [bonjour] の調動<sup>14)</sup>とはほぼ同一であるにもかかわらず、二重分節される言語ではないのである。

現在でもシトー修道会や厳律シトー修道会（トラピスト）の修道院では聖ベネディクトゥスの修道院戒律を守り「沈黙」のうちに修道生活を営んでいる。中世ヨーロッパの多くの修道院においてこのような沈黙の中でのコミュニケーション手段として「身振り」が発達した。サン・ヴィクトルのフーゴーは「身振り」gestusを定義した上で（それは12世紀から13世紀の教会著述家によって基本的定義とされた）、さらに身振りを「指標」indiciumそして「しるし」signumとした。<sup>15)</sup>しかながら、これらの身振りも二重分節性を有せず、言語とは言えない。<sup>16)</sup>

これらの身振りと手話言語の根本的な違いは前者が四肢を使用するのに反し、後者、すなわち手話では上肢しか用いないことである。Ray L. Birdwhistellが動作学kinesicsにおいて人体の動作を記述する際に腰・臀部、上肢、下肢そして足首に関しても記述する必要があったばかりでなく、その他、舞踊においても下肢を中心とした下半身の動きにも上半身と同様に注目しな

12 bis) Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally / Albert Sechehaye, avec la collaboration d'Albert Riedlinger, Lausanne / Paris : Payot, 1916, p. 35.

13) Charles F. Hockett, "The Origin of Speech" (*Scientific American*, Vol. 203, No. 3, Sept., 1960) pp. 94-95 の "Eight Systems of Communication [...]”の表より。（さまざまな議論はあるかと思うが、今回は原典のとおりに掲載した。）

二重分節に相当する "13. Duality of Patterning" には "The meaningful elements in any language — "words" in every day parlance, "morphemes" to the linguist — constitute an enormous stock. Yet they are represented by small arrangements of a relatively very small stock of distinguishable sounds which are in themselves wholly meaningless. This "duality of patterning" is illustrated by the English words "tack", "cat" and "act." They are totally distinct as to meaning, and yet are composed of just three basic meaningless sounds in different permutations. Few animal communicative systems share this design-feature of language — none among the other hominoids, and perhaps none at all" (*ibid.*, pp. 90c-92) との解説がある。

14) Monica Companys / Fabrice Tourmez, *La Langue des signes française en 15 étapes. Méthode progressive pour apprendre la langue gestuelle des sourds*, avec livre et DVD, Angers : Monica Companys, s. d., étape 1, dialogue A; p. 6. (以下、LSFLivreおよびLSFDVDと略。前者は頁で引用、後者は "étape-dialogue" で引用)

なお、本稿独自の実験的簡略表記法であるが、手話(単)語の表記は角括弧で囲んで示した。本稿においてどの手話言語にも共通したこの手話(単)語の表記法では、便宜上、手話言語と同一地域で話される音声言語—両者は別言語であるので言語的に無関係である—で手話(単)語の代表的な意味を示したが、例えば、フランス手話 [normal] は音声フランス語 "normal, bien sûr, évident, nature, naturellement" 等に相当するように多義的であったり、音声言語の語のカテゴリー区分とは異なる点に注意すべきである。非手指動作等は丸括弧で囲み、それをさらに角括弧で囲んだ。ただし、非手指動作が手指動作と同時にされる範囲までは本稿の記述内容を示す程度では不要なので割愛し、動作の終点にのみマークするにとどめた。ハイフンは同時調動を示す。

15) ジャン＝クロード・シュミット『中世の身ぶり』松村 剛(訳)、みすず書房、1996年、179-182頁。

16) 齊藤くるみ『視覚言語の世界』(彩流社、改訂増補版、2005年) 51-76頁では「代替手話 (Alternate Sign Language)」の一つとして「修道院の手話」を取り上げている。「ひとつの修道院の中で、その修道院で使われている手話体系が創造力を持ち、コミュニケーションの手段として有力であること、また視覚言語という性質を活かして、能率の良い言語体系を持っていることが、修道院の手話が、ひとつの「言語」とみなされる条件である」(同書65頁)との主張も理解に苦しむ文章であるが、ある「記号体系」が「生産的」であるか否か、あるいは、「良好」であるか否かと、「言語」であるか否かとは別の問題である。制限されたコードを「制限言語」と呼ぶような場合、この「言語」にどのような意味合いを持たせるのかをよく考えてみるとよい。

なければならないのである。<sup>16 bis)</sup> このきわめて顕著な違いが二重分節との関わりで大きな意味を持つように筆者は感じられるが、詳しい論考はさらに追究を重ねて別の機会に譲りたい。手話言語を認識する際に聾者は相手の手指を見るのではなく、相手の顔を専ら見ることがアイマーク・レコーダーを用いた実験により確認されている。つまり聾者間で対話をした結果、一人は手を注視した割合が0パーセントで顔を注視した割合は95パーセントとなり、もう一人は手が9パーセント、顔が87パーセントであったという。<sup>17)</sup> 手話において受容者側が相手の顔部を注視しながら下肢に視線を移動するのは非効率であるし、裏を返せば手話では視線移動しなくてもよいほど顔の表情や頭部の動きなど非手指動作為舞踊やパントマイムの必要不可欠な下肢の動きを補完しているとも言えるのである。

ここで手話言語とパントマイムの違いをEdward S. KlimaとUrsula Bellugiが手話の図像性として挙げた例を利用して示しておくことにする。彼ら（および10人の研究執筆協力者。ただしこの章は協力者なし）の著した*The Signs of Language*の図1.6は「卵」を表すパントマイムと「卵」に相当するアメリカ手話ASLの手話 [egg] が示されている。<sup>18)</sup> パントマイムの方は一連の流れを5つの動作の主題に分けて示した図、すなわち1) 小さな楕円形の物体を取り上げる [両手で卵の形象を示す]、2) それ [卵] を実際の、あるいは想像上の面 [テーブル等] に打ち付ける動作、3) 体の前で卵の殻を両手で割る動作、4) 前の動作の続きで下方に卵の殻を割り裂く動作、5) 卵の殻を片手で捨て去る動作の連続である。一方、アメリカ手話の [egg] は両手の示指と中指を伸ばして他の指は閉じ（この手形はASLではアメリカ式指文字 [H] の形と同じである）体の前で交差させ、当該四指を伸ばしたまま下方へ開く調動を示している。KlimaとBellugiも指摘するようにアメリカ手話では特定の手形が要求されるのに対し、パントマイムでは手の形や指の伸屈は全く重要ではないのである。<sup>19)</sup> ちなみに、*The American Sign Language Handshape Dictionary DVD*によると [egg] はKlima / Bellugi所載図のように胸の前ではなく、現実には卵を割る時にはほとんど行われなような高い位置である顔の前から調動を始めるので、卵の殻を

16 bis) Birdwhistell, *Kinesics and Context* (op. cit.), pp. 275-78. 舞踊では、例えば、バレエに関して、マルセル・ブルガ、『バレエ入門』一川周史(訳)、白水社、1989年参照。

17) ここでは亀井了 / 長嶋祐二 / 関 宜正 (HIN&R, Vol. 12, 1997) の実験の過程を省き、結論のみを使用した長嶋祐二「手話情報学の現状と課題」(『電子情報通信学会技術研究報告. HIP, ヒューマン情報処理』Vol. 99, No. 452, 1999 (<http://ci.nii.ac.jp/naid/110003272697/>)) より引用した。

18) Edward S. Klima / Ursula Bellugi et al., *The Signs of Language*, Cambridge, Mass. / London : Harvard University Press, 1979, p. 17.

前に簡単に示したように現在では“ASL”と略称されるアメリカ手話American Sign Language は(以前は)“Ameslan”と略称される場合もあった。しかし、これは“Ameslan should not be confused with ASL of which it is only one variety”なのである。(William C. Stokoe / Dorothy C. Casterline / Carl G. Croneberg, *A Dictionary of American Sign Language on Linguistic Principles*, Silver Spring, Md. : Linstok, new edition, 1976, p. iii, n. 1. この辞典に関しては後に詳述する)

19) Klima / Bellugi et al., *The Signs of Language* (op. cit.), p. 18.

20) Richard A. Tennant / Marianne Gluszkak Brown, *The American Sign Language Handshape Dictionary DVD*, Washington, D. C. : Gallaudet University Press, 2006. (以下、ASLDVDと略)

日本における手話言語である日本手話において「朝」を表す[朝 / 起きる]は筆者が最初に学習した入門書では顔はまっすぐに前を向き、片手(利き手)の握り拳を顔の真横の位置から真下に移動させるといった調動であった。しかし、後日、別の入門書を見ると頭を握り拳の方へ傾けて調動開始するものであった。つまり、片手で表した枕に頭をもたれかけた状態から始めて、それに続く目覚める動きを示していたのである。同様なことが木村晴美「手話入門 ― はじめの一步」(『言語』27巻4号, 1998年4月) 36頁下段-37頁(および写真3-5)に[名前]の3種の異(手話)動作が紹介されている。図像的な動作が語彙化しているわけであるが、木村はここに「手話が自然言語たるゆえん」を見出している。(同37頁)

割るという図像性はさらに希薄になっている。<sup>20)</sup>

手話言語が図像性を有するといっても、図像化の過程は各手話言語集団によって異なる。KlimaとBellugiが挙げた例を利用して説明しておきたい。<sup>21)</sup>「樹」を表す手話(単)語は、アメリカ手話ではまるで大地から生えた幹と風に揺らぐ枝のように、水平に構えた片手で支えるようにしながらもう一方の前腕を立てて指を開いて手根(手首)を数回ひねり回して表す。(KlimaとBellugiは例として挙げていないが、このアメリカ手話の調動はフランス手話と全く同じである。<sup>22)</sup>デンマーク手話では両手を対称にしながら樹の頂から下方に円を描きながら降ろし、次に幹をなぞるように両手を狭めて平行に下に降ろす。中国手話では樹の幹を囲むように両手の母指と示指を対称的に丸め、平行に上に移動して表す。(ただし、中国聾人協会(編)『中国手話』によるとこれは正しく[樹(木)]の調動であるが、[灌木]では[樹(木)]の調動の前に[植物]の前半部を調動する。[植物]の調動の前半部とは水平に構えた片方の手に別の手の手根の背部を合わせ、指は真っ直ぐ上に開いてそれぞれの指を交互に動かす。この時、水平に構えた手をそのまま水平に移動させる。アメリカ手話 [tree] やフランス手話 [arbre] の調動と非常に似ている。)<sup>23)</sup>

また、アメリカ手話 (= ASL) と中国手話を比較すると、ほぼ同じ調動ながら、語義を全く異にする手話(単)語が一言語が異なるのだから当然であるが一あり、例えば、中国手話 [爸爸] はASL [secret] と同じ調動であり、中国手話 [朋友] はASL [accompany] と同じである。中国手話の [介绍] の調動はASLとしては手話動作が不可能な調動である。<sup>24)</sup>

音声言語が多くの場合、それぞれの異なる文化を有するのと同じく手話言語もその担い手の文化によって言語記号の表象は異なるのである。手話言語は図像的ではあるが、その表象は恣意的であることが理解できる。<sup>25)</sup>

1960年に手話が二重分節(構造の二重性)を有する言語であることを言語学的に証明したのはGallaudetカリッジ(当時)のWilliam C. Stokoeであった。「手話言語学」sign linguisticsの先鞭をつけた画期的な論考*Sign Language Structure*(以下、SLSと略)の冒頭で彼は次のように述べている。

“The primary purpose of this paper is to bring within the purview of linguistics a virtually unknown language, the sign language of the American deaf. Rigorous linguistic methodology applied to this language system of visual symbols has led to conclusions about

21) Klima / Bellugi et al., *The Signs of Language* (op. cit.), p. 21.

22) Monica Companys / Fabrice Tourmez / Yves Delaporte, *Dictionnaire 1200 signes français-LSF* (Angers : Monica Companys, 2004) p. 6に [arbre] あり。(以下、DLSFと略。頁で引用)

アメリカ手話と現代フランス手話は古フランス手話(“Old French Sign Language”で18-19世紀のフランスにおける手話を指す)を共通起源としているが今日では相互に理解できない言語であり、さらに言えば、イギリスとアメリカの聾者は同じ書記言語(英語)を使用するにもかかわらず、イギリス手話とアメリカ手話は起源的に無関係で相互に理解できないのである。(Nancy Frishberg, “Arbitrariness and Iconicity : Historical Change in American Sign Language”, *Language*, Vol. 51, 1975, p. 696)

23) 中国聾人協会(編)『中国手話』下册, 北京: 华夏出版社, 修订本, 2003年, 頁924和頁922。

24) Klima / Bellugi et al., *The Signs of Language* (op. cit.), pp. 147-63を基にして、中国聾人協会(編)『中国手話』(前掲)およびASLDVDで確認した。

25) Nancy Frishbergは次のように言う: “In general, signs have become less transparent, pantomimic, and iconic; they have become more arbitrary, conventionalized, and symbolic.” (Frishberg, “Arbitrariness and Iconicity” (op. cit.), p. 718)



its structure which add to the sum of linguistic knowledge.”<sup>26)</sup>

手話に関する驚異的な発見を示したStokoeの理論は、実は、1970年代の半ばまでほとんど顧みられることはなく、<sup>27)</sup>発表当時、大学の彼の同僚すらも — 例えば、Gilbert Eastmanであるが — 彼の研究は「時間の無駄をしていると思っていた」<sup>28)</sup> というのである。

SLSでStokoeは音声 (phonetic) 言語の音声行動、音素 (phonemic) レベルの構造、形態素 (morphemic) 構造、形態論 (morphology) および統語論 (syntax) にあたる手話の対応物を観察、分析し、cheremeおよびallocherという概念の導入を提案した。<sup>29)</sup> この術語名称はStokoe自身の説明によると “The combining form, cher-, ‘handy’, as old as Homeric Greek has been preferred to the learned chir- or cheir-.”<sup>30)</sup> とのことである。結合形にせよ χείρ を用いたことは基本的な語義である「手」のみならず、場合によっては「腕」をも含みうることや「言葉」に対して「行為、行動」を示す語（ちなみに、「身振り」は χειρονομία, cf. χειρονομέω）であること等を考

26) William C. Stokoe, Jr., *Sign Language Structure : An Outline of the Visual Communication Systems of the American Deaf*, (*Studies in Linguistics*, Occasional Papers, 8), Buffalo, N. Y. : University of Buffalo, 1960, p. 7.

StokoeがSLSを発表した雑誌 *Studies in Linguistics* はBuffalo大学の人類学・言語学部にて出版されており — Stokoeのこのモノグラフは臨時増刊である —、当時の編集者はGeorge L. Tragerであった。アメリカ構造主義言語学の泰斗の一人であり、SLS刊行の2年前、同誌に“Paralanguage”を発表しているTragerにとってStokoeの理論は注目に値するものであったに違いない。Stokoe自身もこの自著にTragerの“Paralanguage”と *The Field of Linguistics* の2点を参考文献として掲げているのみならず、SLSにおけるStokoeの用語（例えば、“isolate”）にもTragerの影響が見られるのである。（Trager（とEdward T. Hall）のコミュニケーションに関する新しい術語のごくごく簡単な知見はエドワード・T・ホール『沈黙のこぼれ』國弘正雄 / 長井善見 / 斎藤美津子（訳）、南雲堂、1966年（原著1959年）、137頁参照）

ちなみに、我々が今日、音声表記と音素表記（あるいは音韻表記）にそれぞれ角括弧と斜線を使うのもTrager（とBernard Bloch）のお陰である。

27) M. S. Seegmiller, “Stokoe, William (1919-2000)”, in : Keith Brown (ed.), *Encyclopedia of Language and Linguistics*, Vol. 12, Amsterdam : Elsevier, second ed., 2006, p. 157a-b.

28) パッデン / ハンフリーズ 『「ろう文化」案内』（前掲）、149頁所引。

29) Stokoe, SLS, p. 30. 各術語の定義は *ibid.*, pp. 69-70. なお、Cheremeの邦訳として次のような訳語がある。田上隆司他はStokoeの理論を敷衍した独自の理論を展開しながら、「身振り素」は、[略] Cheremeを訳したことばです」（田上隆司 / 森 明子 / 立野美奈子『手話の世界』日本放送出版協会、1979年、213頁注）とあるように用語はStokoeの術語を踏襲している。本名信行他は「動素」（本名信行 / 神田和幸 / 小田侯朗 / 加藤三保子『手話の表記法について』『日本手話学術研究会論文集』7号、1985年、1頁左-右欄）とし、鳥越隆士は「動作素」（鳥越隆士『手話言語における継起的構造モデル — 手話音韻論の最近の動向』『日本手話学術研究会論文集』10号、1989年、3頁）と訳している。神田和幸は当初、「構動素」（神田和幸『アメリカ手話研究の動向』『日本手話学術研究会論文集』6号、1984年、3頁左欄）としていたが、「cheremeの語源、音素との対応から「動素」という訳が最適と考える」（同『指文字の研究』光生館、1986年、197頁）と決したもの、後には訳出せずに「ケリーム」（同『日本手話形態論』『手話学研究』13巻、1994年、2頁）あるいは「ケリーム (Chereme = 動素)」（同『手話学講義 — 手話研究のための基礎知識』福村出版、1994年、95頁）等としている。（神田は『指文字の研究』（前掲）、196頁では「cher-とは、ギリシャ語で「動き」という意味である」としているが、本稿で示したこと（または直に上記SLSの当該箇所か任意のギリシャ語辞典）から判るとおりこれは誤りである。多くの日本の手話研究においてこのStokoeが創出した術語に対し「動」字を含む訳語を充てる理由がここに明らかになる。また、神田『指文字の研究』（前掲）、196頁に「ストーリーキー (William C. Stokoe) は1964年、世界で初めて手話の言語学的構造の研究を発表し」たとあるが、SLSの刊行は「1964年」ではなく、「1960年」である。）

ちなみに、日本手話学会およびその前身の日本手話学術研究会が編纂した学会（研究会）誌である『手話学研究』ならびに『日本手話学術研究会論文集』の紀年法には混乱があるので本稿ではともに奥付にある発行年月日 — こちらも些か混乱があるように思えるが — にもとづいて刊行年を記した。

30) Stokoe, SLS, p. 30.

えて、絶妙な命名であると筆者は考える。<sup>31)</sup> さらにStokoeは「音韻論phonology」に対応する領域に対する新しい術語cherology<sup>32)</sup>を創りだした。Cheremeとはaspectと呼ぶ調動する際の「手指の位置」tabula (= tab), 「手指の形状」designator (= dez), 「動作」signator (= sig) の組み合わせであり、次のような名称で分類され、<sup>33)</sup>それぞれ記号や文字で表される。(下記のStokoe等による辞典の記述との重複を避けてここでは記号および説明は省略した。)

31) Cornell大学出身で中世学と言語学を修めたStokoeは当初、Gallaudetカリッジで英語を教えており、手話言語学に関する分析方法や術語の創出および構造主義言語学の理解能力から判断しても一流の言語学者であったと(言語学者になったと)断定できる。しかし、一部ではあるが、近年の「手話言語学」(「手話学」ではなく)の米国研究者の言語学に対する視野の狭さに筆者は戸惑いを感じる。例えば、手話言語学の旗手の一人であるCarol Paddenと彼女の好配Tom Humphriesが書いた著述の中にある「のちにサピアの教え子で、20世紀のほとんどの期間にわたって言語研究の分野で影響力をもったレオナード・ブルームフィールド」(パッデン/ハンフリーズ『「ろう文化」案内』(前掲), 107頁)という短い件だけでも、次の諸点を正さざるを得ない。1) Leonard BloomfieldはEdward Sapirの教え子ではない。1927年にBloomfieldがChicago大学に移った後に数年間Sapirと同僚となったが、互いに相手の能力に羨望や嫉妬を交えながらも尊敬し合っていたという。2) Bloomfieldの影響力は20世紀半ばのNoam Chomskyの出現で減衰していった。そもそもBloomfieldは1949年に没している。3) 原著者の責任ではないが、一般に米国人名Leonardは「レナード」([lɛnɑːd])と発音する。Oliver Sacks, *Awakenings* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin, revised ed., 1976 (first ed., 1973); 邦訳: オリバー・サックス『レナードの朝』石館康平/石館宇夫(訳), 晶文社, 1993年)に'Caged. Deprived. Like Rilke's "Panther".' (*Awakenings*, p. 242)と答える“Leonard L.”(邦訳「レナード・L.」)と称される登場人物(患者)が出てくるだけにこの誤りは残念である。(パッデン/ハンフリーズ『「ろう文化」案内』の邦訳者の一人は専門を「言語学」としている。)

米国の言語学界においてSapirもBloomfieldも過去の人となってしまったのであろうか。否、これは「言語学」という学問領域が変容してしまったからに他ならない。日本においてもその変容ぶりは凄まじく、「言語学」を修めるにはSaussureが力説したようにできるだけ多くの諸言語を学ぶのではなく、「脳科学」、情報科学、心理学そして哲学を専ら学ばなくてはならなくなってしまった。「言語学」という学問がその隣接領域から刺激を受けること自体は大いに歓迎すべきである。しかし、筆者が危険視しているのは言語学が「哲学」の仮託とされ、諸々の言語を顧みなくなること、および、一特に憂慮すべきことである。言語学が自然科学に収束してしまうことである。どんな学問においても「多様性」が失われてしまえば、その学問は終焉を迎えたと筆者は考える。

32) 古くにChirologia(手話法)というのがあり、1644年にLondonで刊行されたJ[ohn] B[ulwer], *CHIROLOGIA: OR THE NATVRALL LANGVAGE OF THE HAND. Compofed of the Speaking Motions, and Difcourfing Geftures thereof.* [. . .] London, Printed by Tho. Harper, [. . .] 1644 ([John Bulwer], *Chirologia / Chironomia*, with a new introduction by H. R. Gillis, New York: AMS Press, reprint, 1975)の標題にも使われている。(OEDは“chirology”の用例として最初にこのBulwerの書名を挙げている。(The Oxford English Dictionary, London: Oxford Univ. Press, 1933 (repr., 1970), Vol. II, p. 358b); OED第2版も発音表記の変更と一箇所のみわずかな誤植を除けば初版と同一であり、フランス語からの借用語で、廃語としている。(The Oxford Engl. Dict., Oxford: O.U.P., second ed., 1989, Vol. III, 136b)) Bulwerは*Chirologia*において数多くの手指による身振りを挙げながら表出する意味を説明している。記号の体系化という観点からすれば、「ロックの「記号学」(doctrine of signs)の、一種の失敗した予兆」であると遠藤知巳は言う。(遠藤知巳「情念と身体: 17世紀西欧の記号空間」『関西学院大学社会学部紀要』84号, 2000年, 35頁右欄 ([http://www.kwansei.ac.jp/s\\_sociology/kiyou/84/84-ch2.pdf](http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/kiyou/84/84-ch2.pdf)))

Bulwerの同書を含む諸著作に記された「17世紀以降、歴史の表舞台に登場してくるろう者」に関する簡単な言及がバディ・ラッド『ろう文化の歴史と展望—ろうコミュニティの脱植民地化』森 壮也(監訳), 明石書店, 2007年, 183-184頁にある。(ちなみに、この「太字」で表す「ろう者」は米国における使い分けに呼応した“Deaf”に対する日本における表記的試みである。(同書29: 30頁)かつて筆者はいわゆる「隠れキリシタン」の名称に新たな術語を提案したことがある。(拙稿「日本におけるポルトガル語資料」『ロマンス語研究』23号, 1990年, 49頁)しかし、筆者の命名が陳腐に過ぎるためか人口に膾炙するには及ばず、定着したのは「カクレ」という当時、他の領域でも流行した片仮名表記であった。性懲りも無く筆者はここに“Deaf”に対する一つの試行として今回は片仮名表記の「ロウ(者)」を提案する。)

なお、イタリア語のchirologiaは「手相学」のことである。

33) Stokoe, SLS, pp. 71-73の一覧表より。各aspectの定義は*ibid.*, pp. 40-41; 69-70.

**TAB** : Zero tab / Face / Brow / Mid-face / Lower-face / Side face / Neck / Body or trunk / Upper arm / Elbow / Supine arm / Prone arm ; **DEZ** : Fist / Flat hand / Curved hand / Retracted hand / F-hand / Index / H-hand / Pinkie or I-hand / K-hand / L-hand / Bent-hand / R-hand / V-hand / W-hand / Y-hand ; **SIG** : Vertical motion / Lateral motion / To and fro motion / Twisting motion / Carpal motion / Foral motion / Approach / Touch / Graze / Link / Enter / Cross / Separate / Interchange

この理論は些か修整を施し, Stokoe等が編集して1965年に出版したアメリカ手話-英語辞典である*A Dictionary of American Sign Language on Linguistic Principles* (以下, DASLと略。頁で引用。略語右肩の数字は版次を示すが, 各版に共通の場合は版次表示は省いた)に継承され, 1976年にはこの辞典の新版が出版された。<sup>34)</sup> アメリカ手話単語を記述するために彼らが分類した“aspect”のそれぞれの記号および説明をDASLから下記に示すことにする。<sup>34 bis)</sup>

#### Tab symbols

1. ∅ zero, the neutral place where the hands move, in contrast with all places below / 2. ☉ face or whole head / 3. ◡ forehead or brow, upper face / 4. ◡ mid-face, the eye and nose region / 5. ◡ chin, lower face / 6. } cheek, temple, ear, side-face / 7. Π neck / 8. [] trunk, body from shoulders to hips / 9. ↖ upper arm / 10. ↙ elbow, forearm / 11. α wrist, arm in supinated position (on its back) / 12. D wrist, arm in pronated position (facc down)

#### Dez symbols, some also used as tab

13. A compact hand, fist ; may be like ‘a’, ‘s’, or ‘t’ of manual alphabet / 14. B flat hand / 15. 5 spread hand ; fingers and thumb spread like ‘5’ of manual numeration / 16. C curved hand ; may be like ‘c’ or more open / 17. E contracted hand ; like ‘c’ or more clawlike / 18. F “three ring” hand ; from spread hand, thumb and index finger touch or cross / 19. G index hand ; like ‘g’ or sometimes like ‘d’ ; index finger points from fist / 20. H index and second finger, side by side, extended / 21. I “pinkie” hand ; little finger extended from compact hand / 22. K like G except that thumb touches middle phalanx of second finger ; like ‘k’ and ‘p’ of manual alphabet / 23. L angle hand ; thumb, index finger in right angle, other fingers usually bent into palm / 24. 3 “cock” hand ; thumb and first two fingers spread, like ‘3’ of manual numeration / 25. O tapered hand ; fingers curved and squeezed together over

34) William C. Stokoe, Jr. / Dorothy C. Casterline / Carl G. Croneberg, *A Dictionary of American Sign Language on Linguistic Principles*, Washington, D.C. : Gallaudet College Press, 1965. 新版はWilliam C. Stokoe / Dorothy C. Casterline / Carl G. Croneberg, *A Dictionary of American Sign Language on Linguistic Principles*, Silver Spring, Md. : Linstok, new edition, 1976. 初版も新版も辞書本体は変わっていないが, 初版との相違として新版には初版以降の斯界における手話研究の成果を簡単にまとめた新たな“Preface”が付され, それに対応して“Bibliography”で文献数を充実させた反面, 初版における短い文献解題は割愛されている。

Carol Paddenはこの辞典を次のように評価している:「この辞典は, 少なくとも二つの意味で独創的だった。ひとつは, それが言語学の原則に基づいて手話を記述していたことである。二つめは, わざわざひとつの項を費やして, アメリカ手話 (ASL) を用いている <ろう> の「社会的」「文化的」特性を述べていたことである。」(キャロル・パドン「ろう社会とろう者の文化」シャーマン・ウィルコックス(編)『アメリカのろう文化』鈴木清史 / 酒井信雄 / 太田憲男(訳), 明石書店, 2001年, 11頁) — DASL, 297-311の“The Linguistic Community”を執筆したのは署名のとおりC[arl] G. C[roneberg]である。

34 bis) DASL, x-xii. 同辞典の各tab項目(およびtabとして使われるdez項目)の始めに写真で手指の位置や形状が例示されている。(Klima / Bellugi et al., *The Signs of Language (op. cit.)*, p. 52 (Fig. 2.13) に各tabを示す簡単な身体図がある。)

thumb ; may be like 'o' of manual alphabet / 26. R “warding off” hand ; second finger crossed over index finger, like 'r' of manual alphabet / 27. V “victory” hand ; index and second fingers extended and spread apart / 28. W three-finger hand ; thumb and little finger touch, others extended spread / 29. X hook hand ; index finger bent in hook from fist, thumb tip may touch fingertip / 30. Y “horns” hand ; thumb and little finger spread out extended from fist ; or index finger and little finger extended, parallel / 31. Y (allochric variant of Y) ; second finger bent in from spread hand, thumb may touch fingertip

#### Sig symbols

32. ^ upward movement / 33. v downward movement / 34. N up-and-down movement / 35. > rightward movement / 36. < leftward movement / 37. Z side to side movement / 38. T movement toward signer / 39. L movement away from signer / 40. = to-and-fro movement / 41. a supinating rotation (palm up) / 42. b pronating rotation (palm down) / 43. o twisting movement / 44. n nodding or bending action / 45. □ opening action (final dez configuration shown in brackets) / 46. # closing action (final dez configuration shown in brackets) / 47. w wig-gling action of fingers / 48. c circular action / 49. X convergent action, approach / 50. x contactual action, touch / 51. k linking action, grasp / 52. f crossing action / 53. o entering action / 54. d divergent action, separate / 55. ' interchanging action

例えば、前出のASL [tree] は「 $\bar{B}_a \sqrt{B} \wedge$ 」(DASL, 226)、ASL [secret] は「 $\cup A^x$ 」(DASL, 148) と表記される。<sup>34 ter)</sup>

これは当に画期的な表記法の発明であり、かつて手話辞典と言えば当該地域の音声言語から引くものしか作られていなかったものが— 現在でも多くの簡便な市販の手話辞典はこの形式である—、ここにきて手指の形から引くことのできる辞典が誕生したのである。Gallaudetカリッジ出版から初版が出たDASLは現在でもStokoe自身が創立したLinstok出版(1991年よりSign Media)から入手可能である。ただし、この種の理論的な表記法は一般的には馴染みが薄く、ASLの解説書も1910年に初版が出たJoseph Schuyler Long, *The Sign Language (op. cit.)* のような英語で手指動作を説明したものの方が版を重ねるばかりではなく、我が国でも翻訳されるのはStokoeの辞典ではなくLongの方なのである。<sup>35)</sup> 筆者は「言語らしさ」(例えば、音声面では英語らしい発音、フランス語らしい発音、中国語らしい発音、等々)の再現を言語教育の場などで求めるために、音声言語ではOtto Jespersenの非字母音声表記de analfabetiske tegn / die analphabetischen Zeichen<sup>36)</sup>という発声時の調音器官の状態を関与していない器官も含めて記

34 ter) J. S. Long, *The Sign Language (op. cit.)* におけるASL [tree] およびASL [secret] の手話動作の解説は次のとおりである：“Tree. — Let the right elbow rest in the left palm, the forearm extending straight up and the hand as in “5.” twist the hand with a shaking motion rapidly several times.” (p. 124) ; “Secret, Don't tell, etc. — Place nail of thumb of “A” hand against mouth.” (p. 42) なお、前者 (ASL [tree]) の写真図版が Plate XVIII の351番にある。(ただし、この図版は(も)写真中に252番とあるが、同書の図版欄外の注に“The above number[s] should read [...] 351 [...]”とあるとおり351番の図版である。)

35) J. S. Long, *The Sign Language (op. cit.)* の邦訳は管見ながら筆者が手にしたものとして松永端『アメリカの手話』(日本特殊教育協会, 1970)がある。同書において先に挙げたASL [tree] およびASL [secret] の手話動作の解説は次の翻訳のようになる: 「樹 — 右の肘を左の掌にのせておいて、その前腕部を上へまっすぐに伸ばして“5”の姿勢にして、速くふるわせながら二三度ねじらせる。」(145頁); 「秘密、云うな — “A”の手の親指の爪を口につける。」(51頁)

36) Otto Jespersen, *Fonetik — En systematisk fremstilling af læren om sproglyd*, København : Schuboth, 1897-99; id., *Lehrbuch der Phonetik*, übersetzt von H. Davidsen, Leipzig / Berlin : Teubner, 1904; 1913<sup>2</sup>. ちなみに、このデンマーク語原典とドイツ語訳の関係については拙稿「人文学の没落(導論)」(前掲)参照。

述する方法によって教育することを考えてきた。<sup>36 bis)</sup>手話言語においても日本手話らしい動作、アメリカ手話らしい動作、等々の「言語らしさ」を考えるためにStokoeの分析的表記法 — さらにこれより実際の調動を詳しく分析したもの — が必要となるのである。音声言語が言語ごとに調音位置の微細な違いや、声帯振動や口蓋帆の上下運動の極微な開始時期の違いなどに起因する「言語らしさ」が存在するのと同様に手話言語においても位置や運動方向、さらには力のかけ方や動作の硬さなどがそれぞれの「手話言語らしさ」を表出すると筆者は考える。身振りを極端に抑える文化 — 音声言語による文化ではあるが — の中で使用される日本手話と、日本人から見ると「大袈裟な」身振りを行う欧米人の文化 — これまた音声言語による文化ではあるが — の中で使用されるアメリカ手話やフランス手話とではそれぞれの手話動作に違いがあるのは当然であろう。(筆者の観察によると日本手話使用者の調動とアメリカ手話やフランス手話の使用者の調動を比べると、後二者の方が肩や頭の動きが大きく、眉の上げ方などの顔の表情も豊かで、指の使い方も日本手話の使用者の指の動きは柔らかいのに対し、フランス手話使用者の指の動きはそれよりもやや強く、アメリカ手話使用者の場合は更に力強い。 — ここで言う「強さ」とか「柔らかさ」の差異は音声言語における歯閉鎖音の[t] (日本語のt) と [t̥] (英語のt) の違いに相当するような微細な差異であるが、この違いがそれぞれの言語を特徴付けているのである。)<sup>37)</sup>

Stokoeの新しい術語はその後、他の研究者には避けられるものの、理論的には部分的な改良が加えられており、Robbin BattisonはStokoeの3つのaspectに「(手掌の)方向」orientationを独立させて加え、4つのaspectで手話言語を記述した。<sup>37 bis)</sup> Edward S. KlimaとUrsula BellugiのようにStokoe理論のaspectをparameterとして捉え、chereme, allocherをそれぞれprime, subprimeと呼び変えて、調動する際の「手指の形状」hand configuration (= HC), 「調動の位置」place of articulation (= PA), 「動作」movement (= MOV) を「主要パラメーター」major parameterとし、「接触部位」contacting regionまたはfocus, 「(手掌の) 方向」orientation, 「手指の配列」hand

36 bis) 最近では、第28回ことば工学研究会(人工知能学会第2種研究会, 2008年3月28日, 神奈川大学)にて筆者の研究発表を行った。

37) Oliver W. Sacksは次のように言っている:「イタリア人のジェスチャーは、(だれもが知るように)大仰で熱狂的で芝居がかっているが、イタリア手話は、慣習的な手話空間の内部で手指言語のあらゆる語彙規則・文法規則によって厳密に制約され、少しもイタリア化されたとこがない。」(オリバー・サックス『手話の世界へ』佐野正信(訳), 晶文社, 1996年, 197頁, 注37) これはイタリア手話とアメリカ手話の手話空間が同じであるということを行っているのであろう。今後、イタリア手話の調動も観察してみたい。

37 bis) Robbin Battison, "Phonological Deletion in American Sign Language", *Sign Language Studies*, Vol. 5, 1974, pp. 3-4. (ただし, BattisonはStokoeの術語であるcherologyやcheremeを使わない。(Ibid., p. 14, n. 1)) また, "The units of analysis posited by Stokoe still have a great deal of validity, however, and have been used by subsequent researchers in the field. [...] Besides the three aspects explicitly stated, Stokoe (1960) [= SLS] makes use of a fourth type of simultaneous formational information in his transcription system. This is the spatial orientation of the hands, in relation to each other and/or the rest of the body." (Robbin Battison, *Lexical Borrowing in American Sign Language*, Silver Spring, Md.: Linstok, 1978, p. 21)

38) Klima / Bellugi et al., *The Signs of Language* (op. cit.), pp. 35-66 ("Properties of Symbols in a Silent Language"), 特に副次パラメーターに関してはibid., pp. 45-50. ただし, 同書のこの章はDon NewkirkとRobbin Battisonの協力で書かれていることも考慮すべきである (ibid., p. 35, footnote). ちなみに, KlimaとBellugiはconfiguration (of the hand(s)), place of articulation, movement, orientation (of the hands)の4種をmajor (formational) parameterとする等の過程を経て (Ursula Bellugi / Edward S. Klima, "Aspects of Sign Language and Its Structure", in: James F. Kavanagh / James E. Cutting (eds.), *The Role of Speech in Language*, Cambridge, Mass. / London: The MIT Press, 1975, pp. 193; 194), これらの6種の主副パラメーターに至ったのである。

arrangementを「副次パラメーター」とする研究も現れた。<sup>39)</sup> 日本では米川明彦が手話言語に関して日本における最初の(かつ、現時点において唯一の)総合的研究をまとめており、手話にまつわる歴史的な概説はもとより手話言語の構造や特徴にも言及している。同書の中心は日本手話の記述であり、その中で米川は手話因子と手話素から成る手話因子論を展開したが、理論的にはStokoe(およびその後続研究者たち)による理論の組み直しである。<sup>39)</sup>

これらStokoeより後発した研究者たちも理論的な枠組みではStokoe理論からの大きな逸脱はなかった。しかし、後に、アメリカ手話が「音韻 [ ] 規則」を有するという他の研究者等によってなされた論証により、研究の独創性や先行性とは反対に、StokoeはDASL新版の序文(1976年2月29日付)にて“See especially Battison (1974) for evidence that ASL has rules of the kind now termed phonological, and therefore that the 1960 coinages cherology, chereme, and allocher are no longer needed”としているのである。<sup>40)</sup>

手話言語の「音韻」や「手話音韻論」に関する考察は別稿に譲るが、Phonetics and Phonologyの第3巻においてこの巻の編集者であるRochester大学のGeoffrey R. Coulterとシリーズ編集者のStephen R. Andersonが序文に書いたこの疑問に対する回答<sup>41)</sup>も何を言わんとするかは理解できるが、その方法論的発想には筆者としては懐疑的である。Stokoeが「音素」phonemeという語を使用する時、“phoneme(s)”というように引用符を付けることの意味も考える必要があろう。<sup>42)</sup>

手話研究に対するWilliam C. Stokoeの功績は計り知れないものがあると筆者は考えているの

39) 米川明彦『手話言語の記述的研究』明治書院、1984年、90-127頁(「手話因子論」)。これに音声言語の形態論に当る「手話形動論」、さらに「手話統語論」、「手話語彙論」が続く。同書は本邦における唯一の手話に関する包括的なまとまった著述ではあるが、手話言語の記述に関しては本稿の本文で述べるとして、全体的に叙述の濃度にはばらつきがあり、不均整な出来となっているのは否めない。また、注や参考文献一覧も使い勝手が悪い。ただし、日本での手話研究の草創期における卓越した見解も多く、労作であることは確かである。

40) Stokoe / Casterline / Croneberg, DASL<sup>2</sup>, iv. ただし、tab, dez, そしてsigの三つのaspectは固持している。

41) “The obvious first question to ask in connection with this volume is how it is possible to use the word “phonology” to refer to the structure of a language that is signed rather than spoken. The term PHONOLOGY is typically understood to encompass the patterning of sound. But phonology can also be taken to be the study of patterning of the formational units of the expression system of a natural language, where these units are described in terms of inventories of features, with restrictions on how the features are organized into units such as segments, syllables, and so on. Representations of linguistic entries in terms of such units at various levels of abstractness are systematically related by rules subject to general principles. To the extent to which the expression systems of languages in differing modalities appear to be based on comparable sorts of properties, units, and principles, it makes sense to treat the study of such systems as the “phonology” of the languages in question, despite obvious differences in the substantive interpretation of their primitive elements. The question to be addressed, then, is the extent to which the organizing and combinatorial principles of ASL expression units, the nature of rules relating various levels of ASL representations and the general principles of such rule systems, and so on, support the notation that signed and spoken languages have comparable phonology regardless of modality.” (Geoffrey R. Coulter / Stephen R. Anderson, “Introduction”, in: Geoffrey R. Coulter (ed.), *Current Issues in ASL Phonology*, (Phonetics and Phonology, 3), San Diego : Academic Press, 1993, pp. 5-6)

42) “What Bellugi calls parameters and I have called *cheremes* [Stokoe, 1960] are called “phonemes” by my young colleagues who, as I have, usually put quotation marks around the word.” (William C. Stokoe, Jr., “The Shape of Soundless Language”, in : James F. Kavanagh / James E. Cutting (eds.), *The Role of Speech in Language*, Cambridge, Mass. / London : The MIT Press, 1975, pp. 208-09)

で、現在の手話言語学においてStokoeに対する評価が過少なことに不満を抱くが、Stokoe自身は自ら開拓した20世紀の手話言語研究における総括を自信と誇りをもって次のようにまとめている。

“A major priority for sign language research is what new information about language it can disclose. Already it has made clear that hearing and speech are separate systems, neither essential to language itself. It has thus disclosed that language is a deeper, more cerebral system than hearing and speech.”<sup>43)</sup>

手話が単なる身振りではなく、言語であることは、近年、「手話失語」に関する高次脳機能研究からも明らかになった。<sup>44)</sup> 脳卒中で左大脳半球を損傷した先天的聾者でありアメリカ手話の母語使用者である一人の被験者は発作後は手話で表現することが難しくなった。同意できる内容を表現した時に「はい」と頷きながら、手では（誤って）「いいえ」の手話をしたという。手指表現よりも指文字が多用され、手話を使用した場合も「動詞」の変化、派生形態素、複合語、「名詞」の空間指標、「動詞」の一致などが一切、見られなかった。標準化された言語機能評価法であるBDAE（ポストン失語症診断検査）を聾者用に改変したものをを用いてこの被験者を調べた結果、理解は良好である反面、失文法を伴うブローカ失語様の手話失語であることが判った。<sup>45)</sup> また、アメリカ手話の使用者で同じく左大脳半球を損傷した別の被験者は前例の被験者とは反対に、種々の文法標識を使用したのが、時折、意図する手話とは異なる手形や運動を示し、調動の位置の選択が誤っていることもあった。アメリカ手話において有意味で、かつ適切な「パラメーター」を許容され得る組み合わせで使用しているが、ある「パラメーター」から他の「パラメーター」に置換されていたという。<sup>46)</sup> さらにまた、別の同様の被験者は語彙と類別詞の選択に誤りが見られたという。<sup>47)</sup>

このように手話失語に関する高次脳機能研究から手話言語は脳内機構において音声言語と全く同様に処理されていることが判るのである。Poizner等が挙げた一番めの症例は手話言語を

43) W. C. Stokoe, “Sign Language Research : Issues and Priorities”, in : R. E. Asher (ed.), *The Encyclopedia of Language and Linguistics*, Vol. 7, Oxford / New York / Seoul / Tokyo : Pergamon, 1994, p. 3920b.

Stokoeの手話言語学に関する業績のみならず、「聾社会・聾文化」に関する功績も忘れてはいけない。本稿における詳述は割愛する代わりに次のCarol Paddenの言葉を引用しておきたい：「ウィリアム・ストコー<sup>[43]</sup>が示した〈ろう〉者の言語と文化への見解は、〈ろう〉者をふつうとは違う、病理学的な事例として〈ろう〉者を描こうとしたのではなく、文化的言語的な自覚を持った個人として描くことであった。彼の業績は、〈ろう〉者についての事実は隠したり無視したりするのではなく、〈ろう〉者を認識し受容するという新しい段階に到達する手助けになる役割を果たしたことだろう。」(キャロル・パドン「ろう社会とろう者の文化」(前掲), 31頁)

44) 筆者は拙稿「人文学の没落(導論)」(前掲), 20頁, 注36にて「(Chomsky以後の)50年間に言語理論の変転の行き着く所が「脳科学」に委ねることだったとすれば、余りにもお粗末である」と批判した。「脳科学」という名称自体にある種の学問的希薄さを筆者は感じる。)本稿で高次脳機能研究に言及したが、言語学が言語に関する脳の研究の成果を取り入れることと、「脳科学」を言語学の主要領域であると誤解することは全く異なることを明らかにしておきたい。さもなければ、現在の「ソシユール言語学」のように哲学者や文学者によって「言語学」が語られるようになってしまうのである。

ちなみに、ある第一線の「脳科学者」が標榜する「脳科学」に対応する英語は“neuroscience”である！  
45) H. ポイズナー / E.S. クリマ / U. ベルギ『手は脳について何を語るか？手話失語からみたことばと脳』河内十郎(監訳)、石坂郁代 / 増田あき子(訳)、新曜社、1996年、74-97頁。「ゲイル・D」と称される被験者の症例である。

46) 同上書、98-107頁。「カレン・L」と称される被験者の症例。

造り出す脳内の局所が非言語の身振りを造り出す脳内の局所とは異なることを示している。機能的磁気共鳴映像法fMRIを使用した実験によると音声言語も手話言語も受容して理解するのは左大脳半球であるという結果も提出されている。<sup>48)</sup>

上記の諸々のことにより、手話も言語であることが理解できた。そして手話言語の構造が明らかになったことにより、我々、言語学に携わる者はほとんど全ての言語学書において「言語」に対する定義を修正する必要に迫られているのである。「言語」に対する定義は、例えば、Yuen Ren Chao (趙元任) の“Language is a conventional system of habitual *vocal* behaviour by which members of a community communicate with one another.” (斜字体は筆者) における「口頭の行動」というような音声言語からの視点のみでは最早、済まされなくなったのである。<sup>49)</sup>

本章最後のまとめとして「手話言語」および「手話言語の母語使用者」の概念定義を示しておくことにする。筆者としては未だ結論を出すには至っていないので、ここでは現時点で最も妥当であろうかと思われる米川明彦の定義<sup>50)</sup>に修正を施したものをここに挙げておく。

非音声言語として厳密な言語体系を有する身振り言語が「手話言語」である。その「手話言語の「母語」<sup>50 bis)</sup>使用者」とは先天的に聴力がないか、または音声言語を習得せずに聴力を失った者で手話言語を獲得した者であり、ともに聾である両親から生まれた者で手話

47) 同上書, 107-134頁。「ポール・D」と称される被験者の症例。

以上、Poizner等が挙げた3人の症例に関して齊藤くるみは『少数言語としての手話』(東京大学出版会, 2007年), 3-9頁にPoizner等の原著から引用して紹介している。しかし、齊藤自身が自分の表現でまとめすぎている嫌いがある。H. ポイズナー / E.S. クリマ / U. ベルギ『手は脳について何を語るか』(前掲, 99頁)に「以下に述べる結果は、主としてカレン・Lが67歳のとき、発症後1年8ヶ月を経た時点のもの」とあり、齊藤は「カレン・Lは、65歳で失語症になった」(齊藤くるみ『少数言語としての手話』(前掲), 7頁)としているが、「カレン・L」の誕生日やPoizner等による検査月日がわからない限り、発症時の年齢は判らないのである。

48) Kuniyoshi L. Sakai / Yoshinori Tatsuno / Kei Suzuki / Harumi Kimura / Yasuhiro Ichida, “Sign and speech : amodal commonality in left hemisphere dominance for comprehension of sentences”, *Brain*, Feb. 23, 2005. (<http://brain.oxfordjournals.org/cgi/reprint/awh465v1>)

49) Yuen Ren Chao, *Language and Symbolic Systems*, London / New York : Cambridge University Press, 1968, p. 1. ごく一部の語句 (“vocal behaviour”) の翻訳を引用するに止めた邦訳はユアン<sup>[マツ]</sup>・レン・チャオ『言語学入門 — 言語と記号システム』橋本萬太郎(訳), 岩波, 1980, 1頁。

50) 「このようなコードジェスチャーとして、また、非音声言語としての「一定の体系に基づいたサイン言語」が「手話言語」と言える。さらに加えるなら、そのネイティブスピーカーは狭義には音声言語獲得以前に耳がきこえなくなっている人であり、広義には手話言語を第一言語としている人である。」(米川明彦『手話言語の記述的研究』(前掲), 4頁)

米川の定義における問題点として、「ネイティブスピーカー」は「ネイティヴサイナー」の方が妥当であるとともに、「音声言語獲得以前に」という表現は音声言語獲得がヒトとして自然であると受け取られかねない表現であり、筆者としては別の表現を模索したい。母語使用者を「狭義」と「広義」に分けるのも如何なものか。後に米川は次のような定義をしている: 「手話言語とは、聾者間または聾者と健聴者間に使用される、非音声の、手指の動きを中心とした身振りの一定の体系に基づいた言語である。」(米川明彦『手話言語』亀井孝 / 河野六郎 / 千野栄一(編)『言語学大辞典』第6巻, 術語編, 三省堂, 1996年, 696頁左欄); 「手話言語は耳の聞こえない人(聾者)間または聞こえない人と聞こえる人(健聴者)間に使用される、非音声の、手指の動きを中心とした身振りの一定の体系にもとづいた言語である。」(米川明彦「これから手話を学ぶ人のために」『言語』27巻4号, 1998年4月, 20頁上段)

50 bis) 「ろう児のおよそ90%は両親が健聴者である」という。(鳥越隆士「手話の獲得」小林春美 / 佐々木正人(編)『子どもたちの言語獲得』大修館, 1997年, 225頁) によって「母語」の概念の再定義が手話言語使用者に対しては必要となるが、このことに関しては別の機会に論じたい。



言語と音声言語の二言語併用をする者も含む。

なお、本章の目的は手話の言語性を論ずることにあるので、二重分節性に関して述べるに止め、手話言語の文法的特徴については後に簡単に触れるが、形態や統語等に関する詳しい議論は別の機会に譲ることとする。

### 3. 手話言語と音声言語対应手話

「手話言語」が音声言語を単純に身振り化させて二次的コード化したものでないことは前述のように音声アメリカ英語と音声イギリス英語が同一言語の方言的關係にあるのに反して、アメリカ手話とイギリス手話が言語的に異なることから判る。<sup>51)</sup>しかし、これらの「手話言語」と同じ「手話 (広義)」として筆者が分類する「身振り」を用いた言語の中に音声言語を手指を用いて身振り化した「音声言語対应手話」(擬似身振り言語)も存在する。すなわち、筆者は「手指英語」Signed English<sup>52)</sup>や「日本語対应手話」(「手指日本語」)等も「手話 (広義)」の範疇に入れ、「手話 (広義)」を「手指を用いる言語表現」と解する。その際、伝統的に聾者が用いる手話言語は決然と「言語」であることを示すために「手語」と称した方が良いと考えている。例えば、日本手話は「日本語」となる。(上記、図1参照) 実体は不明だが、日本では江戸時代に「手語」という名称で呼ばれた身振り表現があったらしく、<sup>53)</sup>少し前まで手話を「啞語」と呼んでいた中国でも、現在では「手語」と称している。(ただし、中国において「手語」という名称は古くからある。<sup>54)</sup>また、「日本語手話」に対して「日本語対应手話」は簡潔に「日本語手話」と称すれば良いと筆者は考えている。

Gallaudet大学図書館Webサイトの“Sign Languages of the World by Country” (以下、WebGLと略) では“sign language”を“deaf sign language”(本稿の「手話言語」に相当)、“code system”(本稿の「音声言語対应手話」に相当)、“alternative sign language”に分けている。<sup>54 bis)</sup>最後のものは強いて訳せば、「代替手話言語」となるが、これは前述のとおり「言語」ではない。

日本では、主に聾者が用いる「日本語手話」<sup>55)</sup>(「伝統的手話」)と主に中途失聴者・難聴者が用

51) Nancy Frishberg, “Arbitrariness and Iconicity” (*op. cit.*), p. 696.

52) パッデン/ハンフリーズ『「ろう文化」案内』(前掲), 118-119頁では「手指英語」Signed Englishなどの「英語対应手話」を「IS型の手話」と呼ぶ聾者の古老の話を紹介している。この名称は繫辞述語を使用しないアメリカ手話に対し、繫辞動詞(いわゆるBE動詞)を使用する英語対应手話を指している。

53) 米川明彦『手話言語の記述的研究』(前掲), 6-7頁。

54) 諸橋次次『大漢和辞典』(大修館, 修訂第2版第6刷, 2001年), 巻5, 第81頁, 第1段には熟語「手語」の語釈として「琴の音をいふ」とともに「手まねで話す」が載っており、用例の出典は唐代の朱揆 — 一説に『雪壽諧史』所収の『諧噓録』の編纂者とも言う — による『叙小志』である。ちなみに、『諸橋大漢和』の出典は「叙小志」となっているが、これは引用文ともども誤っている。

米川明彦「手話の語誌」(『日本手話学術研究会論文集』6号, 1984年, 12頁右欄)も『諸橋大漢和』を引用しており、その出典を「『唐朱揆<sup>〔777〕</sup>叙小志』」というように書名の誤字を踏襲し、引用文も「生謁一品, 問其妄<sup>〔777〕</sup>, 与之手語。」(下線は原著。返り点なし)と『大漢和』の引用の誤りのままである。この論稿は米川明彦「近代語彙考証 8. 手話」(『日本語学』2巻11号, 1983年11月, 120-123頁)を「訂正補足したもの」とのことなので、こちらを見ると「撥」字および「妄」字は「手話の語誌」の掲載誌の誤植であることが判るが、『大漢和』の誤りはそのまゝ引用しているのである。(同稿121頁下段)しかし、米川の両論考における最大の誤りは時代区分としての王朝名、著者名、書名と連なる複数の名称を一つの書名のように誤解していることである。「叙」は「叙」の、「与」は「與」の略字なのでここでは問題としない。

いる「日本語対应手話」(表現様式によっては「同時法の手話」となる)があるが,<sup>55 bis)</sup> 後者は「手話(広義)」という「身振り」を用いた言語に属するものの、「手話言語」ではなく、音声言語である日本語の文法に則り手指を用いて表した手話である。<sup>55 ter)</sup> (そしてこの二種類の手話を両極としてそれらの混合程度の異なる多くの手話が存在する。<sup>56)</sup> 「平成8年の身体障害者実態調査」において18歳以上で日本手話を習得している者として「43,000人」という数字が報告されている。しかし、この調査の調査方法に疑問を抱き、統計資料から算出し直した市田泰弘他によると、手話言語「日本手話」の母語使用者数は1999年現在、約57,000人と推定される。<sup>56 bis)</sup>

54 bis) Gallaudet University Library, “Sign Languages of the World by Country” (<http://library.gallaudet.edu/deaf-faq-world-sl-country.shtml>).

前述のように齊藤くるみ『視覚言語の世界』(前掲)は「言語学者によって代替手話(Alternate Sign Language)と呼ばれてきた」(同書, 42頁)修道院の手話(最古の記録である*Monasteriales Indicia*と1972年に記録された米国St. Joseph修道院の手話。後者はいわゆるCistercian Sign Language (St. Joseph dialect)), カナダの製材所の手話(いわゆる“Sawmill sign language”), 「オーストラリア・アボリジニ」(同書の表現。すなわちオーストラリア原住民)の手話, 「アメリカインディアン」(同書の表現。すなわちネイティブ・アメリカン)の手話を取り上げている。しかし, 「言語」を「非言語」から分ける規準を明確に示さなければ単なる「紹介」に終わってしまうのである。ただし, 紹介ならば, 例えば神田和幸「北米インディアンの身振り言語」(『目白学園女子短期大学研究紀要』14号, 1977年, 41-54頁)や同「日・米及び北米インディアンのサイン言語(手話)語彙の比較研究 — 基本語彙における類似度」(『日本手話学術研究会論文集』1号, 1979年, 8-21頁)は齊藤『視覚言語の世界』よりはるかに詳細な研究であるにもかかわらず日本人研究者の論考は同書にはほとんど引用されていない。齊藤はかつて「ろう者の手話と代替手話が, 言語として, 決定的に, そして本質的に違うところがあるのかどうかは, 様々な代替手話が比較されると同時に, ろう者の手話同士(アメリカ手話, イギリス手話, 日本手話等)の比較が進み, ろう者の手話に必ず共通である点がある限りは言えないことである」(齊藤くるみ「聞こえる人の手話」『言語』27巻4号, 1998年4月, 99頁上段)と書いていたが, Oliver W. Sacksによると「〈手話〉失語症患者は, 「アメリカインディアンの身振り体系」を覚えることはできても, 〈手話〉や発話を使うことはできないのである。」(オリバー・サックス『手話の世界へ』(前掲), 1996年(原著1989, 1990<sup>o</sup>), 140頁)

なお, WebGLの“United States of America”の項目には“Alternative Sign Languages”として上記の他にBenedictine Sign Language (以下, Sign LanguageをSLと略), Trappist SL, (Oregon とWashingtonのSawmill SL), Gang SL, Motorcycle SL, Underwater (またはScuba) SL, Keresan Pueblo Indian SL, Plains Indians SLが闇雲に挙げられている。

55) 「筆者[神田和幸]としてはアメリカ手話と対比すべく, 対外的には日本手話(Japanese Sign Language またはJSL), 国内的には手話という略称がふさわしいと思う。」(神田和幸『指文字の研究』(前掲), 44頁); 「完全なコミュニケーションを求める聴覚障害者はろう者の手話の社会的承認を求めるようになる。ろう者の手話という表現は前提として「聴者的手話」を認めることになるが, それは手話ではない。[]日本語の変種にすぎないという意味をこめて, [?]自らの手話を「日本手話」と呼ぶ。」(神田「手話学的前提」のうち「日本手話」神田和幸/藤野信行(編)『基礎からの手話学』福村出版, 1996年, 36頁)

55 bis) 括弧内の名称は田上隆司/森 明子/立野美奈子『手話の世界』(前掲), 41-46頁による。

55 ter) WebGLの“Japan”の項目では“Code Systems”として“Manually Coded Japanese = Signed Japanese = Simultaneous Methodic Signs”と“Pidgin Sign Japanese = Middle Type Signs”とが挙げられているが, 筆者が下線を施した用語は他の国における“Sign Languages”の名称にもあまり見られない呼称で, 熟れていない英語表現であり, いかにも日本語名称を英訳したかのような印象を受ける。「音声言語対应手話」(特に音声言語の口形を伴うもの)に対して“simultaneous communication”を省略した“Sim-Com”(「シムコム」)という通称で呼ぶことがあるが, これは厳密には言語名ではなく, コミュニケーションの方法を指すものである。言語自体とそれを表現する様式は区別されて然るべきである。それに加えて, その方法論の中心的存在のGallaudet大学(“simultaneous method”を“official teaching medium”(Stokoe, SLS, p. 70)として導入した当時はカリッジ)関連のWebサイトであるWebGLで“simultaneous”を冠した言語名称がこれしか存在しないのも興味深い。(往時の“simultaneous communication”に関してはJames C. Woodward, “Implications for Sociolinguistic Research Among the Deaf”, *Sign Language Studies*, Vol. 1, 1972, p. 5参照)

日本語対应手話は音声日本語の文法（語順や機能語の面でも）に則して手指で表現する擬似身振り言語である。<sup>57)</sup> 一方、日本手話は日本語とは全く別な独自の言語であり、その手話動作に日本語の二次的コードを見ようとすれば、大きな誤りに陥る。次に日本語対应手話と日本手話を比較してみることにする。手話モデルは岩手県立視聴覚障害者情報センターの高橋健一氏である。

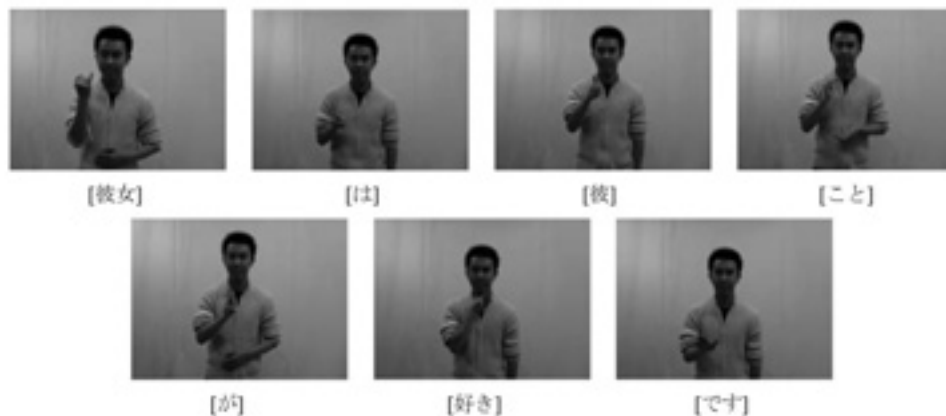


図2 「彼女は彼のことが好きです」（日本語対应手話）

日本における同時法の手話はGallaudetカリッジで同時法を見学した田上隆司等によって当時の聾教育での口話法からの転換を目的として1968年から栃木県立聾学校で始められたとのことであり（田上隆司 / 森 明子 / 立野美奈子『手話の世界』（前掲）, 84-92頁）, 田上等は「栃木方式の同時法的手指法」（同書48頁）あるいは「栃木式同時法」（田上隆司 / 森 明子 / 立野美奈子『はじめての手話』日本放送出版協会, 1981年, 131頁）とも称している。

56) これらの多様な手話の変種を「中間型手話」と称する場合があるが、筆者としてはこの呼称には賛同できない。田上隆司等は「伝統的手話と同時法の手話の中間にあるものを漠然とさして中間型手話とっているわけです」（田上隆司 / 森 明子 / 立野美奈子『手話の世界』（前掲）, 263頁）とするにもかかわらず、「私たち [田上等] は、今後、この中間型手話が多く用いられるようになっていくものと予想しています」（同書264頁）とは“easy-going”に過ぎるのではなかろうか。また、田上等はある人が行った手話を聾者が理解できなかったという「一つのエピソード」を紹介し、音声日本語で話しながら、手話を行ったら「いっぺんで話が通じたでしょう」と言い、「読話、と`手話、は、相補って理解を助けています」（田上隆司 / 森 明子 / 立野美奈子『はじめての手話』（前掲）, 124-125頁）と結論づけている。これでは「ろう文化」を「宣言」したくなる人々が現れるのも無理からぬことであろう。

56 bis) 市田泰弘 / 難波友加 / 伏原桃子 / 三宅三枝子 / 吉井美樹「日本手話母語話者人口推計の試み」『日本手話学会第27回大会 (2001.6.23-24)』。(http://slling.net/works/ichida.etal2001.pdf)

ちなみに、Ethnologue Report for Language Code : JSL (Raymond G. Gordon, Jr. (ed.), Ethnologue : Languages of the World, Dallas, Tex. : SIL International, fifteenth edition, 2005. Online version : http://www.ethnologue.com/show\_language.asp?code=jsl)にて日本手話 (JSL) の人口を「317,000」人とするのは18歳以上の聴覚障害者数と混同したものであろう。

57) 市田泰弘は「日本語の助詞や助動詞を表すために指文字や特別に考案された記号を使用して、日本語を可能な限り厳密に表現しようとするものから、単に日本語を話しながら対応する手話単語を並べ、助詞や助動詞など対応する手話単語がない部分は口形や文脈で補うものまで幅がある。また、日本手話の文法的特徴のうち、日本語を話しながらでも利用可能なものについて積極的に取り入れる場合もある」としている。（市田泰弘によるSLLing-Net [手話文法研究室] の「日本語対应手話」の項。(http://slling.net/resources/glossary.htm)



図3 「彼女は彼が好き(です)」(日本手話)

図2は日本語対应手話で「彼女は彼のことが好きです」という意味の文を手話動作したもので、助詞「は」や「が」が指文字で示されている。助詞「は」は/wa/ではなく/ha/に当たる指文字であることから音声日本語を単に「身振り化」したのではなく、書記日本語も反映していることが判る。助動詞「です」も手話で表現されている。図3は日本手話で同様の内容を表現したものであるが、片手で[彼女]を調動し、次にその[彼女]を表したまま反対の手で[彼]、その次に[彼]を示したまま反対の手で[好き]、そして最後に[彼]に向かって同じく反対の手で「指差し」を行う。

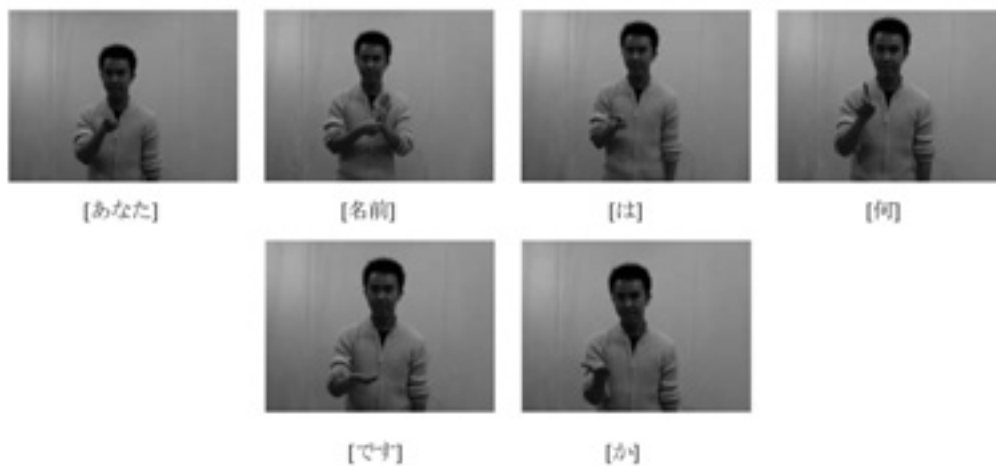


図4 「あなたの名前は(何)ですか?」(日本語対应手話)

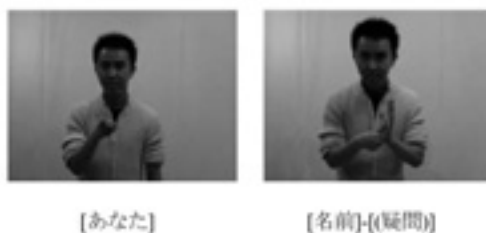


図5 「あなたの名前は(何)ですか?」(日本手話)

図4は日本語対応手話で「あなたの名前は何ですか?」という意味の文を手話動作したもので、助詞「は」、助動詞「です」、そして疑問の小詞「か」が手話動作されている。それに対し、図5の日本手話では[あなた]、[名前]、そして疑問の表情(非手指動作)により同様の意味内容を表現している。<sup>58)</sup>

これらの例だけでも手話言語(日本手話)が音声言語(日本語)の二次的コード化されたものではなく、別個の言語であることが判る。日本手話が日本語と全く異なる言語であることを明快に示したのは箕浦信勝であり、彼による日本手話における「名詞と動詞の不峻別」や「順向・反転」、「輯合性」等の例証により日本手話の自律性がよりいっそう理解できるのである。<sup>59)</sup>

手話言語の自律性だけではなく、ここで「言語」としての音声言語対応手話に関しても言及する必要がある。本稿の冒頭で挙げた「障害者の権利に関する条約」の当該箇所に記された文言である“other forms of non-spoken languages”とは結局、「音声言語対応手話」を表すものと解される。世界ろう連盟名誉理事の高田英一は2006年夏の段階で第7回特別委員会の審議を受けて、「『言語』には「音声言語、手話及び他の形態の非音声言語」が加わりました。「他の形態の非音声言語」とは何なのでしょう。私たちの理解では、「音声言語」と「手話」しかありません。指文字は音声言語に含まれますし、絵文字は言語ではありません。これは結局、言語のことを分からない人が、考えて入れたのだと思います。WFD[世界ろう連盟]としてはこれを削除することを、次の委員会で提案することになるでしょう」<sup>60)</sup>としていたが、最終的に条約として“other forms of non-spoken languages”の文言は残り、「音声言語対応手話」も「手話言語」と同じく一つの言語として国際的に認められる結果となった。

筆者は手話言語の動きの「美しさ」を音声言語の美しい響きを聞く時と同じ気持ちで捉えている。しかし、中途失聴者・難聴者の大切なコミュニケーション手段である音声言語対応手話

58) ここで「あなたの名前は何ですか?」という音声日本語を用いたが、より自然なのは音声日本語にしても「あなた、名前(は)?」であろう。往々にして日本手話に対応する日本語が「音声日本語」ではなく、「書記日本語」になっている研究例が見られる。手話動作「[あなた][名前][疑問)」は自然な音声日本語「あなた、名前(は)?」と一致する。手話言語を「不完全な言葉」と考えることの不当性を逆説的に示している一例であり、音声言語もディスコース分析のための資料を収集すると判るとおり実際の発話はこのように書記言語とは異なるのである。

59) 箕浦信勝「日本手話品詞論試論—セイリッシュ諸語との対照を通して」『日本手話学会第24回大会予稿集』1998年8月1・2日、46-49頁；同「日本の北アメリカの言語：日本手話」『東京外国語大学百周年記念論文集』東京外国語大学、1999年、223-257頁等。

かつて田上隆司他が「伝統的手話では、語形上からも統語上からも、名詞と動詞の区別は困難である。伝統的手話独自の品詞分類が要求される。」(田上隆司/森 明子/立野美奈子「音声語に対して、伝統的手話も統語上の基本的特性について」『日本手話学術研究会論文集』1号、1979、31頁左欄)とし、「自用詞」および「副用詞」という本質に迫った分析(田上隆司/森 明子/立野美奈子『手話の世界』(前掲)、238-241頁)を行ったことが想起される。

60) 高田英一(解説)「障害者権利条約のポイント」『手話通訳問題研究』96号、2006年夏、43頁。高田の言う「私たちの理解」とは次に挙げる神田和幸が示す「手話」と「手話ではない」ものとの区分と軌を一にするものであろう：「アメリカでは手を用いて表現した英語のことをMCE (Manually Coded English) という。英語を手話の単語に置き換えて、英語の順に並べたものもこれに入る。日本でいう同時法の手話もこれに相当する。ここで大切なのは、MCEは言語としては英語の一種であり、手話ではないということである。MCEは手で表現した「英語」なのである。日本ではほとんどの人が同時法の手話も「手話の一種」だと考えているのではなかろうか。」(神田和幸『指文字の研究』(前掲)、44頁)

神田の言うとおり、音声言語対応手話は音声言語という「言語」の表現手段—たとえ不完全だとしても—の一つである。(もしこれを否定すれば、音声言語の音調面を削り落としたような書き言葉も言語ではないということになってしまう。)よって、論争点は「手話」の定義に係わってくるのであるが、筆者による「手話」の定義は前述のとおりなので、彼らの見解とは異なる。

も手話言語や音声言語を慈しむのと同様に尊重したいと考えている。<sup>61)</sup>

#### 4. 手話言語の特徴

最後に手話言語の特徴を掻い摘んで俯瞰しておくことにする。記述や説明は言語理論の知識がなくても理解できるように過度に専門的な方法はとらず、ごく一般的な形式に止めた。アメリカ手話と日本手話は手指動作の解説にしばしば利用されるので、それ以外の手話言語の特徴を一瞥するため、ヨーロッパの手話として、アメリカ手話の母体（の主要素）となったと言われているフランス手話とアジアの手話である中国手話を見てみることにする。<sup>62)</sup> その後に文法的に機能する「非手指動作」や「動詞の屈折」、「指差し」等をアメリカ手話とフランス手話、日本手話を例として示して、種々の手話言語の特徴の概要を示しておきたい。

フランス手話は冠詞がなく (LSFLivre, 41),<sup>63)</sup> 人称代名詞は音声フランス語に見られるような2人称の親称 / 敬称の区別はなく (LSFLivre, 9), 3人称の男性 / 女性の区別もない。 (LSFLivre, 8-9) 繫辞述語もなく, “elle est fatiguée” は “[lui / elle] [fatigué]” (LSFDVD, 1-B; LSFLivre, 7), “je ne suis pas fatigué(e)” は “[moi] [fatigué] [non]” (LSFLivre, 9)である。語順も “tu peux parler?” は “[toi] [parler] [possible] [toi]-(interrogatif)” (LSFLivre, 33; 29)となる。

文法ではないが、語彙面では、音声フランス語が “histoire” の一語で「話」と「歴史」の両義があるのに対し、フランス手話では前者は両手を「閉じたはさみ」 “pince fermée” の形、すなわち示指と母指で輪を作り、他の三指は伸ばす手形を左右に開く調動、後者はフランス式指文字 [H] を両手で作り、回転させながら斜め上方へ移動する調動というように異なる語で表す (LSFDVD, 13-A; LSFLivre, 87; DLSF, 54)。アメリカ手話では「本」と「辞書」は別の語で、前者は両手を “open B” の手形 (アメリカ式指文字 [B] の母指を伸ばした形) で合わせて2度、開閉する。後者は2種類あり、一つは指文字 [D] の手形で、すなわち示指を伸ばし母指と中指を合わせて、反対の手掌の上でページをめくる動作をする調動と、もう一つは指文字 [A] の母指を伸ばした手形、すなわち “open A” の手形で同様にページをめくる調動である。<sup>64)</sup> しかし、フランス手話は「本」も「辞書」も動作の位置と方向は同一で、ただ手掌が前者 [livre] は両手を「平手」 “main plate” の手形で合わせて開閉する調動 (ちょうどアメリカ手話 [book] の調動に類似) で

61) 音声言語対応手話の位置付けに関する問題に関しては多くの議論がなされているのでそれらに譲ることとする。ただ、「脳科学者」酒井邦嘉が次のように述べていることはもっともな事である。「日本手話を必要とする人と、シムコムを必要とする人の両方がいるという状況と社会的要請に応えるためには、公共のサービスであるテレビ放送や通訳などで、日本手話とシムコムを分けて、両方とも用意することが必要である。」(酒井邦嘉『言語の脳科学』中央公論新社, 2002年, 265頁) ただし、教育現場の状況や実際に行われている手話の多種多様な様相等々の複雑な事情もあり、問題はこの酒井の「提言」ほど単純一単純すぎるが一ではない。異文化間 (異集団間) コミュニケーションは双方向をもって初めて有意義な交流が可能となり、少数者の尊厳 ― 言葉もその中で重要な位置を占める ― を徹底的に護持することが必要不可欠であると筆者は考える。

62) アメリカ手話とそのアメリカ手話の母体 (の主要素) となったフランス手話の「起源期」の簡潔な概説は John Tabak, *Significant Gestures. A History of American Sign Language*, Westport, Conn. / London: Praeger, 2006, pp. 7-42 参照。

63) アメリカ手話における同様の記述は Long に見られる: “Other omissions are those of the prepositions and the articles.” (Long, *The Sign Language* (op. cit.), p. 11)

64) ASLDVD による。

(DLSF, 64), 後者 [dictionnaire] は両手を指文字 [C] の手形で手根を軸に開閉する調動 (DLSF, 33. 部厚い本を開く図像) であり, 両語は「類動語」といえる。また, フランス手話の [aimer] の調動は手掌を胸にあてて上方に移動するが, その反意語の [ne pas aimer] は胸から下方へ移動する調動で (LSFDVD, 15-B; LSFLivre, 99), まさに反対の動きを示す「反動語」である。なお, [aimer] の手形は「二股手袋 (ミトン)」「moufle」でも「平手」でも数字 [5] でもよい。(DLSF, 3)

中国における手話に関する最古の記述は10世紀, 唐時代の文学作品において見られるという。<sup>65)</sup> 音声中国語は「述部動詞—目的語」という語順をとるが, 中国手話は「目的語—述語」となる。例えば, 「[家][回]」(「家に帰る」, 音声中国語「回家」), 「[家][电视][看]」(「家でテレビを見る」, 音声中国語「(我)在家里看电视」) である。<sup>66)</sup> (日本手話でも語順は日本語と異なり, 例えば, 日本語「何がいい?」は日本手話では「[したい][なに][疑問]」となる。<sup>67)</sup>)

手話言語において眉の上げ方や口形などの顔の表情などの非手指動作用が疑問を表したり, 関係節を導いたりする重要な文法的機能を担うことはアメリカ手話において Scott K. Liddell が示したとおりである。“[woman] [forget] [purse]” という一連の手話動作を行えば, “The woman forgot the purse” であるが, 同じ手話動作で頭と肩を前屈みにさせ, 顎を前方へ突き出し, 眉を上げて調動すると “Did the woman forget the purse?” という YES-NO 疑問文になるのである。<sup>68)</sup> フランス手話の疑問文に関して LSFLivre には次のような解説がある: “on ferme plus ou moins les yeux. De plus, la question se termine par un léger mouvement du corps vers l'avant.”<sup>69)</sup> すなわち目を細めたり, 体 (あるいは頭) の動きが重要だということが判る。市田泰弘はこれらの非手指動作に関して次のように言っている: 「手話言語の非手指要素には, 一般的な身振りの機能 (顔の表情には手話言語においても話者の感情を伝達する機能もある) のほかに, それとは区別される言語的な機能がある。具体的には, 副詞・動詞などの語彙的な機能, 節構造やモダリティなどを標示する統語論的・語用論的な機能である。」<sup>70)</sup>

「頷き」等の非手指動作も文法的 (統語的) に重要な要素となる。日本手話を例に示すと次のようになる。



図6 「私と兄が(・・)」(日本手話)

65) 戦家環「中国手話の研究」(平成19年度岩手大学人文社会科学部特別研究 [卒業論文]), 2008年1月, 10頁所引。

66) 夏光启「构建手语语法体系的若干思考」赵锡安『中国手语研究』北京: 华夏出版社, 1999年, 頁187。

67) 東京都聴覚障害者連盟 (監修・指導) 『視覚言語 日本手話を話そう 1. 日本手話の世界』(ビクターエンタテインメント, 1997年) より。

68) Scott K. Liddell, *American Sign Language Syntax*, The Hague / Paris / New York : Mouton, 1980, pp. 19-20.

69) LSFLivre, 9.

70) 市田泰弘による SLLing-Net [手話文法研究室] (前掲) の「非手指要素 ( / 動作 / 信号)」の項。



図7 「私の兄が(・・)」(日本手話)

図6では[私]と[兄]の間に「頷き」が入り、「私と兄」となり、図7では「頷き」がなく、「私の兄」の意となる。つまり「頷き」は情報構造においてある種の機能を持ったシンタグムの末位を示すということが予想される。<sup>71)</sup>



図8 「佐藤(さん)が来ます。彼は私に話します」(日本手話)

「[佐藤][来る]-[(視線)」、[彼が私に話す]」(「佐藤(さん)が来ます。彼は私に話します」(図8))は、最初に「[佐藤][来る]」と定位した空間<sup>72)</sup>で「[彼が話す]」行為を表し、同時に自分の方に向けた動作で「[-私に-]」を表す。「[彼が私に話す]」というような場合を一般に人称による「動

71) このようなシンタグムの一群を市田は手話の「イントネーション群」として頭の動きを分析している。(市田泰弘「日本手話の文法」『言語』27巻4号, 1998年4月, 44-51頁) また市田は「頷き」は「2つの要素の順行的な接続という機能をもつ」という。(市田泰弘「手話の言語学 10. 文構造と頭の動き」『言語』34巻10号, 2005年10月, 97頁下段-98頁上段)

72) 「手話では、人物や対象物、位置、場所などを、空間的に表示します。(これを空間定位といいます)。(市田泰弘「手話の基本文法」小川 仁(監修)/神田和幸(編)『手話通訳の基礎 — 手話通訳士をめざして』第一法規, 1991年, 145頁)

73) 同上書同稿, 144頁。市田泰弘「日本手話の文法と語彙」『日本語学』13巻2号, 1994年2月, 27頁上-下段および同「手話の言語学 6. 空間の文法」『言語』34巻6号, 2005年6月, 92頁上段-93頁上段参照。しかし、箕浦信勝の「[日本手話の動詞的語の] 人称を表わす要素は、手話言語学では、人称の「一致」と呼ばれることが多いが、この「一致」も完全に義務的なものではなく屈折とみなすことはためらわれる。」(箕浦信勝「日本の北アメリカ的言語: 日本手話」(前掲), 232頁, 注13) という考察もあり、市田自身も「手話言語の動詞の一致は人称を標示しているのではなく、観察者と動作主・受容者(被動者)の物理的位置関係や心理的社会的関係を標示していると考えられるべきなのである」としている。(市田泰弘「手話の言語学 7. 話し手の身体と視線」『言語』34巻7号, 2005年7月, 94頁上段)

なお、「視線」に関しては市田泰弘「日本手話における視線について」『日本手話学会第22回大会予稿集』1996年7月, 35-36頁および同「ろう者と視覚 — 手話における視線の分析を通して」日本記号学会『記号学研究 17. 感覚変容の記号論』東海大学出版会, 1997年, 71-86頁参照。



詞の屈折」と称し、動作の始点が動作主と、動作の終点が被動作主と一致して、誰が誰に向かってその動作を行うのかが示される一種の「対象活用」である。<sup>73)</sup>



図9 「あなたの先生は誰？」(日本手話)

「[あなた][先生][誰][彼(指差し)](視線)」(「あなたの先生は誰?」(図9))では文末の「指差し」に日本手話(手話言語)の特徴が表れている。この場合、「指差し」は現前にいない不定3人称の主語を指している。<sup>74)</sup> アメリカ手話におけるこのような人称を表す「指差し」をScott K. Liddellは“pronoun coreferential with the subject”としているが、市田泰弘は主語そのものではなく「主語のコピー(subject copy)」にすぎないと言い、鳥越隆士は日本手話における文末の「指差し」は「代名詞ではなく、接語(clitic)であると考え」ている。<sup>75)</sup>

## 5. 結語

以上、筆者の“maiden voyage”として手話言語に関する概略的ではあるが多角的な俯瞰を試みた。聞きしに勝る手話言語の深奥な世界に踏み込んだ思いがする。

いろいろな手話言語を比べてみると、手話言語はどれも同じような性質を有していることが判ってくる。手話言語の類似性が起源を異にするいろいろなクレオール語の統語的画一性<sup>76)</sup>によく準えられるのはおそらくこれらが誕生したばかりの言語を彷彿とさせるからであろう。今後も新たな多くの手話言語を学び、手話言語の特性を見極める必要性を痛感する次第である。

手話の世界のみならず、学問でも社会でもどんな領域にも選択肢の多様性が必要であろうと筆者は考える。多様性を包含する文化ならばその要素のどれかが不全になっても、他の要素で補完することができるからである。多様性を失い画一化した聾教育が例の1880年の会議での決定のみに縛られていた間にどのような状況が生まれていたかは多くの人の知るところである。手話研究に関する概説書やモノグラフ類のステレオタイプの叙述 — 本稿もこの呪縛から逃れられなかったが — を目にしてこの思いが一層強まるのは筆者だけであろうか。

手話言語の研究は「ろう文化」と深く結びついており、「聴者の文化」 — 筆者は囚らずもちら側に属しているので“deictic centre”を置くが — からは視点を変えて異文化に接するこ

74) 木村晴美 / 市田泰弘『はじめての手話』日本文芸社、1995年、42頁; 市田「日本手話の文法と語彙」(前掲)、27頁下段-28頁上段参照。

75) Scott K. Liddell, *American Sign Language Syntax (op. cit.)*, pp. 35-36; 市田泰弘「手話の言語学 10. 文構造と頭の動き」(前掲)、94頁下段-96頁上段; および鳥越隆士「日本手話の文末の位置について」『手話学研究』12号、1992年、21-27頁。

とが肝要である。そうすれば次のような状況もごく自然に自身のものとして享受することができるであろう。

「ある日のこと、サム [聾者] には忘れられないことがあった。ついにこの友達 [聴者] はじつに変な子だとわかったのである。二人で彼女の家で遊んでいたところ、突然、彼女の母親が二人のところへやってきて口をぱくぱく動かしはじめたのである。」<sup>77)</sup>

ともあれ、手話言語は音声言語だけを見ては判らない言語的魅力に満ちた世界であり、その海原を“voyage”することは言語の原初の姿に出会える千載一遇の機会なのかもしれない。

最後になったが、本稿の写真撮影の手話モデルになって頂いた岩手県立視聴覚障害者情報センターの高橋健一氏に心からのお礼を申し上げたい。高橋氏には他にも手話や「ろう文化」に関する貴重なお話を伺った。重ねて感謝する次第である。

---

76) クレオール諸語に関しては、定番のDerek Bickertonなどを挙げたいところだが、筆者はHugo Schuchardtの信奉者ということもあり、ハイチ、マルチニーク、グアドループ等のクレオール語にも手を伸ばしているのでいずれ論考をまとめる機会も訪れるであろう。ただ、筆者はかつて、「クレオールでない言語はない」と言ってきたが、これは「クレオール」という語の誤用であったと反省している。もっと「クレオール」の概念を限定すべきであろう。Robert Chaudensonは次のように言う：「「クレオール」という用語の中味をうすめてしまったり、とりわけその固有性のかなりの部分を取りのぞいてしまうのは、明らかに不都合だ。言語接触という状況があれば、そこにかかわっている諸言語に変化をひきおこさないではない。[略]しかしそれはまた、クレオール化以外にも、言語接触のありとあらゆる状況のなかにも見出されるのである。それだからといって、そうした特徴をもつ言語のすべてを「クレオール語」と呼ぶ必要はない。」(ロベール・ショダンソン『クレオール語』糟谷啓介 / 田中克彦 (訳), 白水社, 2000年, 18-19頁)

翻って、手話研究においてこの誤用が行われてはいないかと心配になる。「手話の伝説・神話」を解きほぐした後に、今度は「クレオールの伝説・神話」を弁明しなくてはならなくなるからである。Kreyolもまた繫累がない人間にとっては皮相的でしかないであろう。

77) パッデン / ハンプリーズ 『「ろう文化」案内』(前掲), 37頁。